

## 壮族始祖女神姆洛甲（ムーロージャ）<sup>〔注1〕</sup>の神話伝承 （『壮族神話集成』より）

首席編輯者：張声震

編注：農冠品

翻訳：項 青

### 【訳者前書き】

本論は1999年に着手された壮学叢書シリーズ（広西民族出版社）に所収された壮族の始祖神話の姆洛甲女神の神話一部を翻訳した。壮学叢書の総責任者は、元広西壮族自治区副主席で、壮族出身の壮・タイ語研究者張声震氏（故人）である。張氏は1985年政界から引退したのち、中国西南民族研究学会や広西壮学会の名誉会長に就任し、西南部や広西壮族自治区の少数民族文化を救うために尽力した。それらの文化遺産を熱心に蒐集・整理し、研究を行った。そして『古壮字字典』、『広西壮語地名選集』、『壮族通史』、『壮族民歌古籍集成』等、数十巻にわたる壮学叢書を出版した。

『壮族神話集成』（広西民族出版社2006年2月）の出版編注の首席編集長・農冠品氏（故人）は同じく壮族出身の研究者であり、中国民間文藝家協会の副主席、広西壮族自治区文学芸術界連合会元研究職の副主席でもある。『中国民間文学集成・広西篇』、『中国歌謡集成・広西巻』、『中国故事集成・広西巻』、『布洛陀經詩訳注壮族史詩』、『壮族長歌・嘹歌』、『瑶族史詩古籍版』等の編輯作業に参加し、首席副編集長と主任研究員としての力量を遺憾なく発揮した。また少数民族文化を守るために働き、国や自治区からも数々の賞を贈られた。

『壮族神話集成』及びそれに関する研究論文の翻訳は、2016年から項青（文学博士・日本文学）と田畑博子（文学博士・民俗学）の二人が着手し、細々と続け

ている。膨大な量であるので遅々として進まずにいたが、熊本学園大学のおかげで、『熊本学園大学文学・言語学論集』第25巻から掲載していただき、2023年まで合計五回載せることができた。今回はいよいよ本篇『神話文本』に入り、壮族の始祖神話を引き続き共同翻訳している。

壮族の始祖神話は盤古（ハンコ）から始めているが、西南地域その他の少数民族にも共通性を持つので省略したい。そこで日本では殆ど紹介されていない創世女神姆洛甲の始祖神話を紹介する。天地の形成、人間及び男女の由来、万物の由来、智恵で難題を克服する等15話を翻訳した。「姆洛甲」（またの名を「乜淥甲」「麼淥旁甲」「姝洛甲」等）という神話は、女性神の生殖行為と人類の起源を記すものである。「姆洛甲」の壮語の音意は、[me6]「母」と [luk8]「子」の合成で、[kja:p7] 意味は「母子合体」、あるいは「身ごもる母」、すなわち祖母神である。彼女は偉大なる生育女神で、人類を創造した懐胎女神であり、母系氏族集落時代の主神である。

なお本文における注釈は、原注以外はすべて訳者によるものである。

[項 青<sup>[注2]</sup>]

## 第1話、姝洛甲（ミーロージャ）<sup>[原注①]</sup>（広西東蘭・師公調<sup>[注3]</sup>）

一、

いにしえのことを語るなら

まず姝洛甲（ミーロージャ）を歌おう

いにしえは明暗がなく

混沌とした一つの塊

いにしえは昼夜分かちなく

天は上下なく

地は高低がない

縦横もない  
 東西もなく  
 野山に獣の鳴き声もない  
 森に鳥の囀る声もない  
 われらの布洛陀（プーロート）<sup>〔注4〕</sup> が生まれ  
 われらの妹洛甲（ミーロージャ）が生まれ  
 布洛陀（プーロート）は天を支え持ち、  
 妹洛甲（ミーロージャ）は大地を押さえ、平らにした  
 布洛陀（プーロート）は太陽を作り  
 妹洛甲（ミーロージャ）は月を作り  
 布洛陀（プーロート）は森を作り  
 妹洛甲（ミーロージャ）は田を作り  
 布洛陀（プーロート）は河川を切り拓く  
 妹洛甲（ミーロージャ）は泉を掘る  
 布洛陀（プーロート）は桃榔<sup>〔注5〕</sup>の木を植える  
 妹洛甲（ミーロージャ）バナナの木を植える  
 布洛陀（プーロート）は糯米<sup>〔注6〕</sup>の種を探してきた  
 妹洛甲（ミーロージャ）は粳米<sup>〔注7〕</sup>の種を探してきた  
 布洛陀（プーロート）は三本足の腰掛を作った  
 妹洛甲（ミーロージャ）は百草衣を作った  
 さまざまな仕事を終えたので二人は結婚した  
 藤の蔓が絡み合うように一生離れない  
 我らの子孫を生み  
 代々長くこの地に住み続ける

二、

妹洛甲（ミーロージャ）について語ろう  
妹洛甲（ミーロージャ）の情けは天より高い  
昔、天帝はとても不公平だった  
女が妊娠するのは九年かかる  
子どもを大きく育てるために汗は池になるくらい流す  
子どもに言葉を教えるのに舌が裂けるほどで  
子どもにハイハイを教えるのに日が暮れるまで教え【原注②】  
子どもに生活の知恵を教えるため出稼ぎをした【原注③】  
異郷の地で気苦労が絶えず、  
彼女の頑張りは誰も見てない  
子どもたちの心配事は山ほどがあったが  
誰も助けてはくれない  
ただ子守のために一晩三回起き  
昼はおしっこで服を濡らし  
夜はおしっこで木のベッドを濡らす  
ベッドは朽ちるほどあちこち濡れ  
妹洛甲（ミーロージャ）はあれこれ考え  
自分は濡れたところに寝る  
子どもは乾いたところに寝かせる

三、

続けて妹洛甲（ミーロージャ）を語ろう  
話はますます長くなる  
その時、米がなかった

果物もなかった  
 チガヤ<sup>〔註8〕</sup>を食べて満腹にした  
 竹の葉を食べて命を長らえた  
 妹洛甲（ミーロージャ）は考えた  
 あちこちに行き、稲の種を探した  
 見つかった稲の種で命を長らえた  
 荒野で千種類の草があり  
 その中から一束ずつを選んだ  
 地上に千種類の木があり  
 それらから一本ずつ選んだ  
 選別する際に必ず口に入れて味見をした  
 甘いものは服に包み  
 苦いものは捨てる  
 甘いものは家に持って帰り、植えた  
 植えたが芽が出てこない  
 妹洛甲（ミーロージャ）はとても心配した  
 いろいろ考えた  
 木の種を布に包み  
 草の種は枕の袋に入れた  
 夜はそれを抱えて寝  
 昼は背負って出かけた  
 それでも芽が出ない  
 それで自分の母乳で育ててみた  
 三月も経つと種は充分に母乳を吸ったので膨らんだ  
 種をもって山の斜面に行き  
 斜面いっぱい撒いた  
 種が土に落ちると若芽が出た

一粒の種は芋の山になった  
一粒の種は砂糖黍の林になった  
二粒の種は桃と李の木になり  
二粒は稲とトウモロコシになった  
一粒の種は森になり  
一粒の種は粟（あわ）になり  
二粒は柿とカンラン（中国オリーブ）<sup>[註9]</sup> になり  
二粒は南瓜と大豆になった  
これらが地上の農作物となり  
人間世界に食糧ができた  
これらは地上の木の蔭となり  
世の中に住居ができた  
姝洛甲（ミーロージャ）の恵みは大きい  
姝洛甲（ミーロージャ）の情けは深い

四、

その時突然天が暗くなったり明るくなったり  
暗雲が立ち込めて消えなかった  
姝洛甲（ミーロージャ）は知恵がある  
天に昇って星を取り、明りにした  
それで世の中至る所明るくなった  
明かりは庭先を照らし  
娘たちの機織りを照らす  
高い山に明かりを当てると  
男たちは田を耕すことができた  
山間の平地に明かりを射すと

人々は自由に往来できた  
 世の中に明かりを射して何日も経たないうちに  
 強い風が吹いた  
 一回目の風が吹くと  
 妹洛甲（ミーロージャ）は刀を持って立ちはだかった  
 二回目の風が吹くと  
 妹洛甲（ミーロージャ）は斧でたたき切りに行った  
 それにしても風はやまない  
 斧でたたき切る作業も止まない  
 風は怒って恨み  
 天庭に戻って告げ口した  
 天上から呼出しのチャルメラの音が聞こえた  
 その音は彼女に天上に帰るようにと催促をするものだった  
 妹洛甲（ミーロージャ）はいうことをきかない  
 相手にしなかった  
 風はさらに怒った  
 風はますます強く吹いた  
 蛾と飛ぶ虫を放って  
 星の明かりを消そうとした  
 一回目に来たとき  
 妹洛甲（ミーロージャ）は袖で払って退治した  
 二目に来たとき  
 妹洛甲（ミーロージャ）は足で踏み潰した  
 三目に来たとき  
 妹洛甲（ミロージャ）は素手で握り潰した  
 十回も百回も襲ってくる  
 虫は火に飛び込んで灰になった

残りの一対の雄と雌の虫は  
剣は口の中に隠し  
明りを切り、消そうとした  
さらにランプのまわりの地面を壊そうとした  
妹洛甲（ミーロージャ）はシャンチン<sup>〔注10〕</sup>の木で作った弓を引き  
すすき草の矢を構えた  
第一番目の矢を射ると  
その矢は虫の口に突き刺さった  
第二番目の矢を射ると  
その矢は虫の右目をつぶした  
第三番目から五番目までの矢を射ると  
雄の虫の口から鬼火<sup>〔注11〕</sup>の烟が吹き出た  
すると強い風が吹き始め、黒い雨が降り始めた  
黒い雨とともに雹も降ってきた  
雨の水滴は独楽（コマ）のように大きい  
雹の太さは米を入れた竹筒のよう  
妹洛甲（ミーロージャ）は葉を塗った矢<sup>〔注12〕</sup>を隠し持ち  
妹洛甲（ミーロージャ）は神のような非凡な手と足をもち  
三回弓を引くと  
黒い雨は遠い天の果てに逃げ去った  
三本の矢を射ると  
固い雹は綿のようにやわらかく融け  
雄の虫、雌の虫はすべて死んだ  
天の明りは千年照らす  
天の明りは千年照らす



五、

むかし、山を開墾するとき  
 田を耕す牛はいなかった  
 鶏を使ってまぐわを引かせた  
 犬を使って鋤を引かせた  
 しかし鶏はいうことを聞かず、畦道に飛び上がり  
 犬もいうことを聞かず、田の畦に逃げ出した  
 布洛陀（ブーロート）はいろいろ考えた  
 妹洛甲（ミーロージャ）も考えた  
 布洛陀（ブーロート）は雄の牛を作り  
 妹洛甲（ミーロージャ）は雌の牛を作った  
 桃榔の蔓で牛の角を作り  
 桃榔の葉で舌を作った  
 実で乳房を作り  
 枝で足を作った  
 棒で目を作り  
 花で耳を作った  
 筋で雄の性器<sup>【注13】</sup>を作り  
 表皮で雌の性器<sup>【注14】</sup>を作る  
 雌牛を作ったのは子牛を生ませるため  
 雄牛を作ったのは鋤で田を耕すため  
 昼間牛は田を耕し  
 夜は山に入って休む  
 森の中には虎と豹がいて  
 鳴き声はまるで落雷のようだ  
 牛たちは驚いて逃げ出す

汗をかきながら逃げ出す  
雄牛は魂を失ったように  
牝牛もぼんやりした  
草を食べても飲み込まず  
水を飲むと血の痰を吐く  
そこで妹洛甲（ミーロージャ）は牛の魂を買い戻し  
布洛陀（プーロート）は牛の肝っ玉を作った  
牛の肝っ玉作りは本当に難しい  
牛の魂を買い戻すのは難しい  
布洛陀（プーロート）は百二十の山を登り上がり  
一本の宝の草を見つけた  
布洛陀（プーロート）は百二十の嶺を超え  
不老不死の実を見つけた  
布洛陀（プーロート）は天の果てまで歩き  
ようやく一滴の苦水を掘り出した  
牛の胆っ玉を作り、牛のはらわたに入れた  
それから牛は虎や狼の鳴き声を恐れなくなった  
妹洛甲（ミーロージャ）は牛の魂を買い戻すに行く  
苦勞は尽きない  
正月に家を出て  
桐林を通り抜け  
桐の葉がすべて落ちて  
どこにも牛の魂は見つからない  
二月に家を出て  
清らかな小川に出会った  
水の流れは清らかだ  
それにしても牛の魂は見つからない

三月に家を出て

葛の蔓がたくさんある坂に来た

千本の葛蔓に尋ねても

牛の魂のありかは知らなかった

四月に家を出て

苦い泉のほとりにやってきた

苦い泉は苦い水を湧き出す

その水に聞いても答えない

五月に家を出て

みずみずしい草がたくさん生えた斜面に来た

草々に聞いても

牛の魂は見つからない

六月に家を出て

紅水河<sup>〔注15〕</sup>を尋ねてみる

紅水河の答えはオーオーオーと水の音のみ

牛の魂は雲の上に飛び去ったと言う

そこで妹洛甲（ミーロージャ）は一对の金の翼を縫った

山を越え、雲の上に飛び上がった

白い雲、黒い雲に尋ねたが

白い雲も黒い雲も返事をしない

妹洛甲（ミーロージャ）は雲の神に線香をあげて願いをした

雲の神様はやっと答えた

お前たち、夜は牛を牛小屋に入れなさい

牛を野放しにして、ぶらぶらさせないよう

牛は牛小屋に入れるべきものだ

そうすれば魂魄は自然に落ち着く

それを聞いた人々はそれぞれの家に牛小屋を作った

それから牛たちは夜歩きをやめ  
牛小屋の中に安心して暮らした  
虎が叫んでも牛は恐れず  
狼が叫んでも牛は困らない  
牛は牛小屋に住むと牛の度胸がついた  
魂も流離わなくなった

【原注】

- ① 本歌の資料提供者は覃茂徳、覃茂春。収集翻訳者は覃剣萍。採録時期1982年9月。採録場所は広西壮族自治区東蘭県三石郷長筒村。この歌は『中国歌謡集成・広西巻』（農冠品主編、中国社会科学出版社、1992年出版）に所収されたものである。これらは覃茂徳、覃茂春の両兄弟が持つ「巫公唱本」の手写本から翻訳した。壮族の民間風俗によれば、毎年農曆大晦日の夜に、東蘭県三石郷一帯の裕福な家では、牛を殺して先祖を祀る。その際、師公（壮族のシャーマン）は頼まれて、祭祀の責任者となる。覃師公兄弟はともに師公であり、本歌の記録者・覃剣萍は彼らの親戚であった。そこで覃剣萍は彼らが3冊の写本を持っているのを見かけた。歌詞はおよそ3000行あり、何度も覃剣萍は閲覧することを覃茂徳、覃茂春の兄弟に頼んだが、師公唱本は他人に見せることができないと、親戚であるにもかかわらずこれを拒んだ。しかし1982年、度重なる頼みに応じて覃兄弟は、そのうちの一冊を貸し出した。覃剣萍はその中の「唱殺牛祭祖宗（牛を殺し先祖を祀る）」という一段を書き写した。その後、1985年に覃兄弟は相次いで亡くなった。覃剣萍は覃兄弟の子孫に写本の閲覧を頼んだが、答えは「すでに彼らとともに埋葬した」だった。それが本当かどうかわからない。抄録したこの部分は元の本も腐ってしまい、欠字がある。またいくつかの文字も解りづらい。また翻訳した際に、もう一人の師公に頼んで校正をしてもらった。それによっていくつかの欠けた字を補うことができた。

ミーロージャ（妹洛甲）は姆洛甲（ムロージャ）のこと。

- ② 人の影が九尺ほど長く伸びる。本文では、影が長く伸びるほど夕方まで働いて、朝から晩まで忙しいというたとえ。「九尺」はとても長いことを意味する。壮族では影によって時を知

る。「一尺」は「33.3cm」に相当）

- ③ 門出は家を離れて仕事をする事。出稼ぎ。

## 【訳者注】

【注1】妹洛甲（ミーロージャ）は壮族始祖女神の名。広西壮族自治区の北部に位置する北壮と南部地域に位置する南壮は、それぞれ「姆洛甲」「彌洛甲」「沫洛甲」「妹洛甲」（mu/mi/mei）等のさまざまな当て字がある。また西林県壮族出身の識者（65歳、広西壮族自治区冶金地質探査研究員。仕事のため各少数民族地域によく回る者）韋橋林氏によると、壮語の「mei」本来の意味は、孤児を育てる母親の意もある。

【注2】熊本学園大学講師、文学博士。中国広西壮族自治区出身。共同訳者及び日本語監修田畑博子。元中国山東省曲阜師範大学翻訳学院日本語教師、文学博士。なお本文における以下の注釈は、全部訳者によるものである。

【注3】師公調は、師公教の法事・雨乞い等の祭事を行う際に、師公が各種の儺面（三十六種の神様・七十二種の儺面・合わせて一〇八種の役あり）をかぶりながら、おのおのの祭事の音楽に合わせて、唱本を歌い踊る経文のこと。現在でも広西壮族自治区の貴県、樟木と龍山等の壮族居住地に存在している。

師公とは、壮族の師公教の男巫のこと。師公教は道教が壮族地区に入ってから、壮族特有の信仰と融合し、新たな宗教として生まれたもの。師公は半農業・半宗教的な存在でありながら、妻子を持ち、禁酒等の厳しい戒律はない。主な仕事は、法事や様々な祭事等を行い、「跳神」（神降ろしの託宣）といった祭事の主導である。詳細は楊樹喆の『壮族民間師公教——巫儺道釈儒的交融和整合』（広西師範大学出版社、2009年）を参照。

【注4】「布洛陀（ブーロート）」は、壮語の麼教の解釈によれば、意味は[pau5] 祖公（男神）、[luk8] 河谷と[to2]（鬼神体に附す、法術、法術を施す意）で、合わせて河と谷の中で法術力が強い男神である。また智慧の祖神とも呼ばれている。彼は何でも知っており、できないことはない創世神であり、父系氏族集落の男神である。布洛陀は初め、おそらくある集落の祖神であったのが、しだいにその集落の権力の拡大に伴って、それらの連盟の中で主導的な位置を占めるようになったか。そのためその祖神が連盟的な集団全体の祖神となった。

【注5】 桃榔、サトウヤシ。古くから花芯の汁から糖を作り、茎から澱粉、葉柄の繊維から縄等を作る。壮族地区や東南アジアでは商業価値の高い植物である。梁代の任昉撰『述異記』巻下に「有樹、名曰桃榔。皮裏出屑如麵、用作餅食之、與麵相似。因謂之桃榔麵焉」と記す。

【注6】 糯米は壮族の人々が最初に栽培した穀物であると言われている。今日も少数民族地域では主食は米ではなく、糯米を食べる。腹持ちが良いとされる。なお祭事に使うお酒や供え物もお餅類等は糯米で作る。

【注7】 本文では「粘谷」となるが、籼米、秈米とも言う。うるち米の一種で、細長くて粘り気が少ない。主食として食べられる。詳しい記録は清・屈大均撰『広東新語』巻十四「食語」〈穀〉篇には見える。屈大均は「東粵少穀、恒仰資於西粵。西粵之貴粟尤多穀。(中略) 東粵之稻多種、有曰香秈。粒小而性柔甚香。其紅者曰香紅蓮、有白珍珠稻。粒圓而白、最早者曰六十日、種之六十日而熟。(中略) 而從化有赤黏、白黏、黃黏、花黏……黏米似粳而尖小長身。其種因閩人得於占城、故名占。亦曰秈、秈音仙。先熟而鮮明、故謂之秈。(中略) 糯米則有黃、白、紅、麻四種。秈有餘秈、赤秈、宜作糍餌。皆穀品之良者。(中略) 嶺南之粳性熱、唯土人宜之。穀多黏」と説明している。

【注8】 茅 (チガヤ)。イネ科の多年草。原野に群生し、高さ約60センチ。晩春、葉より先に「つばな」と呼ばれる円柱状の花穂をつける。根茎を漢方で茅根といい、利尿・止血薬とする。

広西壮族自治区ではよく結草である意味を表わす。これは一掴みの草で一つの結び目を作ること。それによって「占有」、「警告する」、あるいは他の意味を表わしている。現在の壮族の「社」の集団生活の中で、この方法は日常的によく見かける。広西の西部に住む壮族の人々は、この記号をチワン語で「hauh (号)」と呼ぶ。すなわち「認定する」の意味である。もし村の周辺道路に牛の糞があり、その上に木の枝が挿してあったり、茅草の結び目を置いてあれば、それは壮語でmaxbangj (馬綁) と言い、この牛の糞はすでにだれかが所有する糞であり、先にこの場所を定めたという意味で、あとで時間のある時に取りにくるという意味を示している。もし山の斜面や山の上の草が茂っている場所で、茅が一定の間隔で結び目が作られているならば、この辺りの茅草に所有者がいることを意味している。また田圃と畑を取り囲む道の両端に、結び目のある草が挿されている場合は、それはこの田圃や畑がすでに穀物の種や、他の農作物の種が蒔かれていることを意味している。人と家畜が踏まないよ

うに知らせている。またある時、山や田圃の畔に乾いた干し草や、切って揃えた若い草があり、そのそばに結び目の草があるならば、これは誰かが印をつけたものである。あるいは、山や畑の横に干した木の枝と若い草が束にして置いてあり、そのそばに結び草がおいてあるならば、これは人がわざと残したものであるという意味である。

草を結んで物事を示すという方法を、壮族の村では老若男女問わずみんなその意味を知っている。その上、それぞれが自覚的にこのルールを守っている。西林県では壮族の人々が新しい土地を開墾する際は、選ばれた地域の周りと真ん中にいくつかの結草を置く。そうすることでこの土地はすでに主があることを意味することになる。他の人はこの結草を見て、自らその意味を知り、自覚的に別の場所を探す。柳城県古砦の壮族の人々は、生産生活の中で草を結ぶことによって、共通のある意味を理解する。例えば山の中の田圃が犁で耕してあったり、鋤で土を掘り起こしてあったり、農作物が植えてあった場合など、草の結び目を木の枝に結んで田の中に挿せば、これは人々が田に入ってはいけないことを示している。また山里のある家で豚小屋の糞を掃除しようとするとき、小屋の前に草結び目を置いておけば、この家は糞を掃除していることを意味している。村人はこれを見て豚を外に出しているのは理由のあることで、それが糞の掃除のためであることを理解する。また山の中にたくさんの果樹があって、その木に草結びがあった場合、誰もそれを勝手にとることはしない。また山里の民家の軒下の土台や公共用道路の盛り土の路床を、まだものごとのよくわからない子どもたちが棒でこじ開けたり、穴を掘ったりした場合、その場所に草の結びを置いておけばもう誰もそこをいたずらすることはない。あるいは誰かが家に来ると約束した後、急用で出なければならない時、家に草結びを挿しておけば来客は自然にその意味がわかる。また広西寧明の公母山の麓に住む若い壮族の男女達は、野原でデートをする時、自分たちの気に入る場所を選んで、入り口に草結びを挿しておけば、誰もここに近づかない。上林、柳江、忻城、靖西、那坡などの県の壮族にもこのような習慣が20世紀の50～60年代まで依然として残っており、草結びで物事を記録する方法を行っていた。

【注9】橄欖（カンラン）。オリーブの一種、烏欖と方欖の種類があり、東南アジアや福建・広東・広西等の地域で産出している。バルサムなどの樹脂を含む。樹脂から精油され、外傷治療薬となる。広東・広西壮族自治区では広く栽培され、実は漬物として食用される。古くから南

国から献上されたと晋・嵇含撰『南方草木状』には記している。『南方草木状』巻下「橄欖樹」には、「橄欖、樹身聳。枝皆高数丈、其子深秋方熟。味雅苦渋、咀之芬馥、勝含鷄舌。呉時歲貢、以賜近侍。本朝自泰康後、亦如之」と記す。更に唐代の段公路撰・龜図注『北戸録』巻三に「橄欖子、八九月熟。其实大如棗。広志曰、有大如鷄子者。南人重其真味、一説香口絶勝鷄舌香。亦堪煮飲、飲之能消酒。……」と、南の人々は喜んで食することを記録している。

【注10】椿樹。香椿（チャンチン）の木、センダン科の落葉高木。中国原産で古くから日本に伝えられている。中国では若葉を食用とする。香料、家具や工芸材として広く利用されている。

【注11】鬼火烟。「鬼火」は怪しい火の煙。広西壮族自治区では火の玉や人の魂を指す。

【注12】「葉弓」は葉を塗った弓矢。最も古い記録は晋・張華撰『博物志』巻二には「交州夷名俚子。俚子弓長数尺、箭長尺餘（中略）塗毒箭之鎗鋒、中人即死。不時斂藏、即膨張沸爛。須臾肌肉都尽、唯骨耳。其俗誓不以此葉治語人」と、交州（現在の広西壮族自治区南部とベトナム北部をさす）の毒箭について記録し、その葉を解く秘密を漏れた人には、毒箭を当たる場合は、解毒してあげないという地元の風習があるという。また宋・周去非撰『嶺外代答記』巻六「器用門」〈葉箭〉には「溪峒弩箭皆有葉、唯南丹為最酷。南丹地産毒、其種不一、人乃合集醞釀以成葉。以之傳矢、藏之竹筒、矢・鏃皆重縮。（中略）苟中血縷、必死。唯其地人、自有解葉」と、地元の人のみ解毒の葉をもっているという

【注13】桃榔（サトウヤシ）、その樹皮の筋が柔らかいので、編んで雄牛の性器を作るという。晋代の嵇含撰『南方草木状』巻中「桃榔樹」には、「桃榔樹似栟櫚実、其皮可做繩、得水則柔韌、胡人以此聯木為舟。（中略）出九真、交趾」と、広西壮族自治区・東南ベトナムやカンボジアなどアジア産とする。

【注14】桃榔（サトウヤシ）の柔らかい表皮を使い、編んで雌牛の性器を作ること。

【注15】紅水河は壮族にとっては母なる大河である。広西壮族自治区の北西部に流れる大河で、珠江水系の主流である。西江の別名。その源は上流の雲南省の南盤江であり、途中で貴州省の北盤江と合流すると紅水河と呼ばれる。下流では自治区の中部都市柳州で柳江と合流し、黔江と呼ばれる。その後、郁江・潯江等と合流し、梧州で西江として広東省に横切り、最後広州市で南シナ海に注ぐ。全長638キロメートル、流域面積は3.32万平方キロメートルであり、河の流域には鉄分の高い紅土のため、川水は赤色である。それで「紅水河」と呼ばれている。



# 【参考】

壮族先住民は、「波乜 [po6Me6]（即ち雄と雌）」の二種類があることを発見し、動物も二種類に分かれていることを知った。自分自身と自然を比べて自然を認識する。壮族先住民から見れば、世界万物はみな両性に分かれており、この両性類別は、互いに対立しながら結びついている。万物の発展変化も、この両性類の組み合わせによって進行し、万物両性類観を形成した。

壮族の神話、民間宗教、民俗事象、壮語の中にもこの「波乜」の思想が具体的に現れている。例えば壮語で天は「po6fa4」で、意味は「天の男」で、地は「me6dum1」で、意味は「地の母」。太陽を父と呼び、月を母と呼ぶ。また晴天では暑く、雨天では寒いなどの気象現象に対しても、雄と雌としている。「non2po6non2me6」は「一日は雄、一日は雌」の意味で、至高無限の天に住む神に対して「波叭 [po6Me6]」と呼び、意味は「雷公」で、雷神が人間世界に派遣した使者の蛙に対しては、「姪圭」[ja6kve3] といい、すなわち「蛙婆」と呼ぶ。天と地の力を合わせて雨を降らせる。「蛙婆節(ワーポチェ)」という祭りの中では、最初に捕まえた蛙を「天女」と言い、蛙を捕った男を「蛙郎(蛙の婿)」と呼ぶ。そして互いに結婚の儀式を行う。そしてその蛙の婿はこの祭りのリーダーにされる。

壮族の祭りの田の神は「波那乜那」[po6na2Me6na2] と呼ばれている。意味は「田公田母」である。壮族民間宗教の麼教の最高神は、男の祖神・布洛陀と女の祖神・麼淥甲である。儀式があるたびに彼らと呼び降ろして、主神の座に座らせる。男女の神が揃うと民間の災いが除けられ、福をもたらす。このような万物の波乜観は、他の分野にもさまざまに表現されている。例えば高い音の銅鼓の音は「nuən2po6」（雄の音）といい、低い音は「nuən2Me6」（雌の音）という。祭りや銅鼓の競技の中では、必ず雄と雌を組み合わせる。そうやって初めて靈験あらたかな美しい音が現れると信じられている壮族の「波那乜」は原始哲学と思惟、美意識によってもたらされたものである。壮族の「波那乜」は、自然界に存在する二元性の客体とみなされ、「波那乜」の二元性をもって世界を認識し、世界は一对であるという考え方を表している。これは元来ある生物学の両性の意味ではない。壮族の万物の「波那乜」の観念は、原始哲学、思惟であり、彝族（イ族）の万物雌雄の観とも似ている。漢民族の万物陰陽観念とも似ている。違うのは後者が抽象的な概念であり、壮族は形象性を持つ類比観念で

あり、独特な特性を持っていることである。

〔『壮学叢書』総序所収『壮族の歴史起源と文化』第二章「壮族文化及びその特性」

〈7宇宙「三蓋」[0a:m1ka:i5]（三界） 説と万物「波乜」[po6Me6] に雌雄があるという素朴な哲学思想〉による〕

## 第2話、姝洛甲（ミーロージャ）の誕生（広西大化<sup>【原注①】</sup>）

遙かにしえのとき、天と地は分かれていなかった。空中に大きな気の塊がグルグルと巻き、勢いはますます強くなり、いつの間にか卵ようになった。この卵の中には三つの黄身があった。

この卵を転がして廻しているのは、一匹のフンコロガシだ。ほかには一匹の螟蛉子<sup>【注1】</sup>がその卵の上に飛んできて、穴を開けようとした。毎日働いたので、ようやく穴が開いた。すると卵は割れて、三つのかけらになった。一つのかけらは上に向かい、飛んで行って空になった。一つのかけらは下に向かい、飛んで行って水になった。残った一つのかけらは真ん中に留まって今私たちが住む大地になった。

真ん中の大地の上には、日ごと風が吹いたり、雨が降ったりした。そこにたくさんの草が生え出した。そのうち一本の草に花が咲いた。その花の中から女が生まれた。その女は人間の最初の女だった。この女は髪を振り乱し、体中に長い毛が生えていた。そして賢かった。後世の人々は彼女を姝洛甲（ミーロージャ）<sup>【原注②】</sup>と呼んだ。彼女はとても知恵があったので、頭の良い人々の師だった。それで姝洛西（ミーローシ）と呼ばれた<sup>【原注③】</sup>。

空と大地が分かれたとき、上の世界と下の世界が分かれたときに、螟蛉子は空に向かって飛んで行った。地上に残ったのは、フンコロガシだった。一匹は天を作り、一匹は地を作った。フンコロガシはとても勤勉だったので、広い大地を作った。螟蛉子は怠け者だったので、狭く作った。天が狭かったので、広い大地を覆いかぶすことができなかった。そこで姝洛甲（ミーロージャ）は大地を引き

延ばして空につなげた。それでようやく天を地に覆いかぶせることができた。大地の盛り上がったところを山と高地にし、凹んだところは谷や深い峡谷になった。水は低いところへ流れるために川や湖、海ができた。

妹洛甲（ミーロージャ）は大地がとても物寂しく感じた。そこで人間を作ろうと思いついた。彼女は両足を広げて二つの大きな山の上に立った。すると突然一陣の風が吹き、尿意を催してきた。排尿したその尿は大地を濡らした。彼女は手を使って濡れた大地の泥を掘り起こした。そして自分の姿を見ながら、人の形の泥人形を作った。そして作った人形の上に草をかぶせておいた。49日経って草を除いてみると、泥人形はすべて息をしていた。

その人間はあちらこちらを走り回り、飛び跳ねたので、それを止めようとしても止められなかった。そこで妹洛甲（ミーロージャ）は、たくさんの楊桃（スターフルーツ）<sup>〔註2〕</sup>と唐辛子を採ってきて、この人々に向かってばらまいた。するとこの人々は果物を取り合った。唐辛子を取った人は男になり、楊桃を取った人は女になった。それから世の中に男と女ができた。

この人々は、とても働き者だった。しかしその中、一人の子どもは甘やかされていたので、働くのが嫌だった。みんなは彼が怠け者だとして食べ物を与えなかった。そこで彼は仕方なく木の葉を食べるしかなかった。ある日、彼は女が綿から糸を紡いで作った紐を盗んで捕まった。ところが彼は自分が盗んでいないと白を切った。彼は盗んだ紐を尻の穴に隠したのだ。そのために紐は尻尾になった。彼は猿の先祖になった。

さらに妹洛甲（ミーロージャ）は真ん中の人間界をもっと賑やかにするために、泥を握ってあちこちにばらまいた。そのため空には飛ぶ鳥がいて、地上には歩く獣がいた。

雨が降り出した。鳥や獣や人間、すべてに雨宿りの場所がなかった。そこで妹洛甲（ミーロージャ）は両足を広げて座って、一つの洞窟に変身した。それから人間と鳥と獣は洞窟で雨風を凌ぐようになった。

【原注】

- ① 本文口述者は覃奶。70歳。壮族。広西壮族自治区大化県都陽鎮の農民、非識字。採録と標準語翻訳者は藍鴻恩。男性、壮族。広西壮族自治区文化芸術家協会幹部、大学卒業。採録時間は1984年、場所は大化県都陽鎮。原載は『中国民間故事集成・広西巻』に掲載（過偉主編。中国ISBNセンター2001年出版）
- ② 原載は藍鴻恩の注によるもの。その原注は「姝洛甲（ミーロージャ）」の「姝」は壮語、母親の意味。「洛甲（ロージャ）」は「鳥の名で、その鳥は大変聡明な鳥である」。「ミーロージャ」は意識すれば、「聡明な知恵のある母親」。
- ③ 「姝洛西」（ミーローシ）は壮語、意識は「智恵の先生である母親」と藍鴻恩は解釈している。

【訳者注】

【注1】本文には「螟蛉子（めいれいこ）」とある。蝶等の幼虫で、おおむし。螺贏（から／トックリバチ）という寄生バチが螟蛉の体内に卵を産み付け、かえった幼虫がこの虫を餌にする。昔の人はこれを寄生バチが子を産まずに螟蛉を自分の子として養うのだと思い込み、螟蛉を養子に例えた。『詩経』「小宛」には「螟蛉有子、螺贏負之（螟蛉子あり、螺贏之を負う）」とある。

【注2】楊桃はフルーツの名。原産地はインド周辺。海洋を経て伝来したため、洋桃という。その後音読みで「楊桃」「羊桃」（ようとう）とも呼ぶ。五斂子（ゴレンシ）ともいい、漢方薬にもなる。清・屈大均撰『広東新語』巻二十五「木語」〈羊桃〉篇には、「羊桃、其種自大洋来、一曰洋桃。（中略）一名三斂子、亦曰山斂。斂、稜也。有五稜者名五斂…広人以為蔬、能避嵐瘴之毒。中蠱者、搗自然汁飲、毒即吐出」とある。

この楊桃を横に切ると、星の形になるので、スターフルーツとも呼ぶ。縦で切る時、女性の性器に似ているので、地元では女性を揶揄することになる。また唐辛子の形は男性の性器に似ているので、本話の由来となったか。

【参考】

壮族は、「古越人は越の声を重んずる」という風習を伝承してきた。彼らは「幼いころから歌を習い」、村々で歌を掛け合うのが習いとなった。「すべて即興、そして自分で作る」。しか

も定期的に歌掛けをすることで、歌謡文化は非常に発達している。これによって氏族集落時代の集団の祭りや、部族外の複数地への通い婚制度から、決まった配偶者婚制度への過渡期であることがわかる。それは現存する二種類の古い歌の形式から、その面影を窺うことができる。

一つは「歓敢」[fuən1ka:m3]といい、「歓」は山歌、「敢」は岩の洞窟である。つまり「歓敢」は、岩窟の歌となる。現在右江流域広西田東県にある仰岩と田陽県の「敢壮」（穴に住む壮族）は、昔から毎年数万人以上の人が集まり、岩窟で歌掛けをする。有名な壮族の伝統的な長篇「排歌」は、「歓敢」と「歓嘹」[fuən1li:u2]（漢語訳「嘹歌」。すでに現代語版のものが出版されている）であるが、この種の歌掛けは古代壮族先住民から起源し、「山洞に随って居住す（『隋書』「南蛮伝」）」、「岩穴を以て住み止まる（宋・楽史撰『太平寰宇記』）」と記録されている。岩の洞窟を崇拝して、「敢卡」神を祀る伝統がある。「敢卡」[ka:m3ka1]の壮語のももとの意味は、「股の間の岩穴」を意味している（女陰を比喻している）。訳して子育ての女神としている。明らかに「歓敢」と「歓嘹」は、母系社会の自然崇拝と生殖崇拝から生まれた産物である。歌謡形式は、時代とともに変化しつつ、現在は恋歌を中心とする伝統の形式となっている。

〔『壮学叢書』総序所収『壮族の歴史起源と文化』第二章「壮族文化及びその特性」

〈8、歓敢 [fuən1ka:m3]（岩洞歌）と歓婭圭 [fuən1ja6kve3]（蛙婆歌）を代表とする歌謡文化〉による〕

### 第3話、創世女神・妹洛甲<sup>【原注①】</sup>（桂西地区<sup>【注1】</sup>）

#### (1) スターフルーツと唐辛子を撒く話<sup>【注2】</sup>

妹洛甲（ミーロージャ）はとても背が高く、体格の良い女神だった。ある日、おしっこがしたくなったので、風に向かって両足を広げ、それぞれの足を山にかけてまたがった。二つの山の間におしっこをして、その土を濡らした。妹洛甲（ミーロージャ）はその濡れた土を握ってたくさんの人間を作った。その時、人間は男女に分かれていなかった。そこで妹洛甲（ミーロージャ）は山へ行き、数

多くのスターフルーツと唐辛子を摘んできた。できあがった人間に向かってそれを撒くと、みんなはそれを奪い合って、スターフルーツを拾った人は女になり、唐辛子を拾った人は男になった。それから人類は男と女に分かれるようになった。

壮族のある村では、今でも赤ん坊が生まれると、親戚や村人は必ず、「今度生まれた赤ん坊は唐辛子か、スターフルーツか」と聞く。このような聞き方は、妹洛甲（ミーロージャ）が果物を撒いたという伝説に由来している。

## (2) 赤い花と白い花を贈る

妹洛甲（ミーロージャ）は花の山を管理していた。たくさんの花を植えていた。壮族の人々は、彼女を「花の婆ちゃん」「花王聖母」と呼んでいる。

彼女が花を誰かに贈ると、その家には赤ん坊が生まれる。

花は赤い色と白い色がある。赤い花を贈ると女の子が生まれ、白い色を贈ると男の子が生まれる<sup>[註3]</sup>。ある時、花山の花に虫がついた。干ばつによって水も足りなくなった。すると人間の子どもたちは病気になった。病気の子を持つ家の人々は、師公（シャーマン）に頼んで法事をした。そして子どもが病気になったことを花の婆ちゃんに報告をする。花の婆ちゃんが虫を取り、水を撒くと、花は再び元気になってぐんぐん育つ。すると子どもも元気になった。

花の婆ちゃんが赤い花と白い花と一緒に植えれば、人間の男女が夫婦になる。

人が死んだら花の山に帰り、花に戻る。

壮族のある村では新郎新婦の新居や、新生児が生まれる妊婦の部屋の中に必ず山の花を摘んできて、花の婆ちゃんの神棚に位牌を飾る。そして次のことを祈願する。「こどもを授けてください」、「赤ん坊が病気にならないように守ってください」、そのほか夫婦円満、子孫繁栄、母子健康などである。

ある地方では花の婆ちゃんの神棚は、寝台の枕元に設ける。そのため枕元婆・枕元妹と枕元母も呼ばれる。

### 【原注】

- ① 本文の口述者は黄勇利、広西壮族自治区田陽県的那塘村人。詩人、民間文芸家。採録者は過偉。過偉の原注によると、この二つの壮族神話（第3話の(1)・(2)）は、1980年彼が壮族民間文化を採集した際に、黄勇利さんから聞いたものである。ここには民間文芸に卓越した貢献をした民間文芸家に対して謹みながら回想し、記録するものだという〔過偉1991年1月に記すと〕。原載は『女神・歌仙・英雄—壮族民間故事新選』農冠品・陸上来・過偉主編（広西民族出版社1992年出版）に掲載されている。

### 【訳者注】

【注1】桂西地区とは、現在「桂」は広西壮族自治区の略称で、桂西は広西の西部をさす。清・屈大均撰『広東新語』巻二十五「木語」〈桂〉篇には「古多以桂為舟。（中略）蓋古時番禺多桂、故曰番禺之桂」と記録している。『新唐書』巻222「南蛮伝下」〈西原僚〉には、「西原僚居広容之南、邕桂之西（中略）西接南詔。」とある。広容の南、邕桂の西に住む西原僚（壮族の古称）は、至徳（583年）初め、首領の黄乾曜氏が諸洞蛮を率いて叛乱をおこした記事がある。また『漢語大詞典』によると、「桂、唐州名。即今広西壮族自治区桂林」と記されている。

【注2】スターフルーツはその形から女陰を表す。唐辛子は男性器を比喻する。前出を参照。

【注2】清・屈大均撰『広東新語』巻六「神語」〈花王父母〉篇には、「越人祈子、必於花王父母。有祝辞云：白花男、紅花女。故婚夕親戚皆往送花」と記している。

## 第4話、妹洛甲（ミーロージャ）は三度人間を作った 【原注①】

(広西大化) 【注1】

むかしむかし大むかし、地上はたった一人の人間だけだった。その人間は我らの始母神妹洛甲（ミーロージャ）だ。妹洛甲（ミーロージャ）は、一人地上で暮らしていたので、とても寂しく退屈だった。そこで妹洛甲（ミーロージャ）は、人間を作ることをついた。

一回目は泥で人間を作った。泥で人の形を作り、藁で包んで洞窟に持って行っ

て寝かせていた。49日を過ぎると妹洛甲（ミーロージャ）は、覆いをとって見た。すると中の子どもたちが動き出した。彼女は大声で叫んだ。「子どもたち、外に出なさい」するとたくさんの子どもが走って出てきた。それで世の中に最初の人間が生まれ、賑やかになった。ところがこの子どもたちは役に立たなかった。なぜかというと、雨が降ると彼らは外に出られなかった。雨に濡れるとベタベタして柔らかくなった。そして晴れて、乾燥すると動けなくなった。太陽にあてれば手と足が硬くなってしまい、うまく動けなかった。これらの人間はどう生かせるか、全く妹洛甲（ミーロージャ）の思うとおりにになっていなかった<sup>【原注②】</sup>。そこで二回目の人間作りを挑戦したいと思いついた。

二回目の人間作りは、バナナを使った。生のバナナに人間の形を彫刻して、藁に包んで再び洞窟に寝かせた。49日を過ぎたのでまたかぶせた覆いをとって見ると、子どもたちが動いていた。「子どもたち、外へ出なさい」また叫んだ。すると子どもたちは外に走って出てきた。その子どもたちを見ると、みんな柔らかく白くて前のよりきれいだった。ところがまた体の頑強さが足りないので、前回と同じようにうまく働かせることができなかった。これもまた妹洛甲（ミーロージャ）は気に入らなかった。それでまた三回目、また人間を作ろうと思った。

妹洛甲（ミーロージャ）は三回目、蜂の卵と蝶の卵で人間を作った。蜂の卵と蝶の卵を酢の入っている甕の中に入れた。上に藁をかぶせて、さらにその上に黄色の泥で塞いだ。昼は米汁をかけ、夜は露をかけた。妹洛甲（ミーロージャ）は、今回は時間をかけ、熟成させてから開けようとした。満9ヶ月過ぎると子どもたちはちゃんと人間の姿になった。酢の甕を開ける日、妹洛甲（ミーロージャ）は、「今回は丁寧に仕事をしたから、子どもたちは健全に誕生するだろう」と思った。いろいろ確認して、まちがいないと思って甕のふたを開けた。ところで、ちょうど開けようとしたその時、雄鶏が雌鶏を追いかけてそばを通りかかった。そこで妹洛甲（ミーロージャ）は気づいた。「まだこの人間に男女の区別をつけていない<sup>【原注③】</sup>、危ないところだった」と。急いでふたつの籠を持ってきて、甕の横に置いた。一つの甕の中には唐辛子と猫豆<sup>【注②】</sup>を、もう一つの甕にはすっぱい



スターフルーツと檳榔<sup>【注3】</sup>を入れた。すべてそろった。妹洛甲（ミーロージャ）はいよいよ酢の入っている甕を開けた。そしてその甕に向かって叫んだ。「子どもたちよ。外へ出てきて、何か食べなさい」と。子どもたちは次々出てきて、食べ物を取った。唐辛子と猫豆を取った子どもは男になり<sup>【原注④】</sup>、スターフルーツと檳榔を取った子どもは女になった。今回の人間は、手足がしっかりしていてよく働いた。その上、男性、女性の区別もあって結婚することもできた。そして子孫を殖やすことができた。妹洛甲（ミーロージャ）はとても喜んだ。

#### 【原注】

- ① 本文の口述者は覃鼎琨、50歳、壮族。採録翻訳者は覃承勤、壮族。採録地点は広西壮族自治区大化県瑶族自治县那康村。原載『女神・歌仙・英雄—壮族民間故事新選』農冠品・陸上来・過偉編（広西民族出版社 1992年出版）。

これは始祖女神人間を作る神話の漢訳である。その中には「泥で人間を作る」説、「バナナを彫刻する」説、「蜂や蝶々の卵で人間を作る」説があるが、これらはすべて古代壮族の「万物に魂が宿る」という概念の痕跡であろう。

- ② 「不合心水」は桂林柳州地区の方言で、「思う通りにならない」の意味。  
③ 「好彩嗜」も方言で「間に合ってよかった」の意。  
④ 「娃崽」も方言で、子どもをさす。ここでは男の子をさす。

#### 【訳者注】

【注1】 広西壮族自治区大化県。

【注2】 猫豆。ムクナマメ。はっしょうまめ。Mucuna pruriens var. Baker ex Burck. 一年生蔓植物。東南アジア、中国大陸南部の亜熱帯が原産地。広東・広西及び海南島に栽培されている。そのまま食用とすると毒の成分を含まれているが、疲労がとれることや男性の精力を強くする役割があるので、うまく処理して現地ではよく食べる。

【注3】 檳榔、ヤシ科。または棕櫚科の常緑高木。東インド原産で、幹は直立して枝がなく、幹頭に羽状の復葉をつけ、葉の間に鶏卵大の実をつける。実は食用・薬用になる。アレコリン

などのアルカロイド由来する成分があり、中枢神経系に対する麻酔作用がある。環太平洋各地では、石灰や他の植物の葉とともにこねて一種の嗜好品を作り、嘔みたばこのように用いる。東南アジア諸国や南中国等現在も見られる。

古くから宋・周去非撰『嶺外代答記』巻六「食用門」〈食檳榔〉にも記録していたが、清・屈大均撰『広東新語』巻二十五「木語」〈檳榔〉篇には詳しい。「(檳榔) 産瓊州、以会同為上(中略) 歲售於東西兩粵者十之三、於交趾、扶南十之七。以白心者為貴…粵人最重檳榔。以為礼果、款客必先擊進。聘婦者施金染絳以充筐実。女子既受檳榔、則終身弗貳」と、女子の婚姻の際に大きな役割を担っていることが分かる。

★本文の籠の中にある「一つは唐辛子と猫豆」は男の子の性器を、「もう一つの籠にはスターフルーツと檳榔」は女の子の性器をイメージしたもの。これらは壮族地域で子どもの性別を表わす時に使われる表現である。

## 第5話、妹洛甲（ミーロージャ）が子どもを産む（広西大化）【原注①】

むかし、地上にたった二人だけ人間がいた。それは妹洛甲（ミーロージャ）と布洛陀（プーロート）であった。その時、盤古（ハンコ）<sup>〔注1〕</sup>は、天地を作ったばかりで、地上には何もなかったの、妹洛甲（ミーロージャ）と布洛陀（プーロート）は多くのものを作らなければならなかった。さあ、先に何を作ろう！妹洛甲（ミーロージャ）は先に人間を作ろうといい、布洛陀（プーロート）は鳥を作るべきだといった。二人の考えは一致しなかった。お互いに譲らなかった。そのため何千年もの間、何も作らずそのまま過ごした。ある日妹洛甲（ミーロージャ）は布洛陀（プーロート）にいった。

「私とあなたが譲り合わなければ、何もできません。それでまず私たちが結婚することにしませんか。夫婦になりましょう」

「結婚？」布洛陀（プーロート）はいった。

「私は兄弟というものしか知りません。夫婦というものがいったいどのよう

なものか知らないのです」そう言うと、布洛陀（プーロート）は怒って下界に降りていき、兄弟の図額（トゥグウ）といっしょに暮らすことにした。そこで何千年も戻らなかった。

妹洛甲（ミーロージャ）は一人だけ残された。妹洛甲（ミーロージャ）はとても寂しくて孤独だった。毎日毎日山頂に行き、布洛陀（プーロート）の帰りを待ち続けた。ある日、布洛陀（プーロート）と図額（トゥグウ）が海で水遊びをしていると、遠くの山頂に妹洛甲（ミーロージャ）がぼんやり立っているのが見えた。そして彼女が自分を待っていることがわかった。そこで彼女にいたずらをしてやろうと、口に一杯水を含んで、妹洛甲（ミーロージャ）に向かって思いっきり吹きかけた。この水は一直線に外れることなく妹洛甲（ミーロージャ）の臍に向かっていった。妹洛甲（ミーロージャ）が家に帰ると、お腹は日に日に大きくなった。そして9ヶ月後、12人の子どもを産んだ。

12人の子どもは大きくなると。妹洛甲（ミーロージャ）に聞いた。

「お母さん、私たちのお父さんは誰ですか」。

妹洛甲（ミーロージャ）は答えた。

「お前たちのお父さんは布洛陀（プーロート）だよ。下界に行って兄弟と暮らしているよ」。すると12人の子どもたちは下界に行き、布洛陀（プーロート）を尋ねた。そして口々に親しく「お父さん、お父さん」と呼んだ。布洛陀（プーロート）はどうして彼らが自分をお父さんと呼ぶのかさっぱりわからない。そこで彼は妹洛甲（ミーロージャ）を尋ねて聞いた。

「どうしてあの子たちは私のことをお父さんと呼ぶのか」

妹洛甲（ミーロージャ）は答えた。

「あなたは忘れてしまったの？あの日、あなたは海から水を含んで私に吹きかけたでしょう。あの水で私は妊娠したのです。そしてこの子たちが生まれたのです。水を吹きかけたのがあなただから、この子たちはあなたをお父さんと呼ぶのです」

壮語で「噴」と「爸」は同音で、ともに「波bo」<sup>[注2]</sup>と呼ぶのである。

【原注】

- ① 本文の述者は覃ト兵、46歳。壮族、農民。採録翻訳者は覃承勤、壮族。採録地域は広西壮族自治区大化羌墟郷。原載は農冠品・陸上来・過偉編『女神・歌仙・英雄—壮族民間故事新選』（広西民族出版社、1992年出版）。

これは始祖創世神話の漢訳である。布洛陀（プーロート）と妹洛甲（ミーロージャ）は兄と妹であるので、結婚できない。それで布洛陀（プーロート）が海水を口に含んで妹洛甲（ミーロージャ）に吹きかけたところ、彼女が妊娠して人類が生まれた。これは古代壮族の原始的な世界観を表わしている。母親だけが分かって父親がわからない時代のことを記している。

【訳者注】

【注1】（ハンコ）は神の名。中国の天地開闢神話の主人公。巨人であり、天地が形成されていない混沌の状態の中に生まれ、1万8000年たって、天地を押し分けて離し、その後に三皇が出たという。その死後、肉体が分散して日、月、山、江海などになったともいう。もともとは古代中国南方地域（湖南、江西両省以南）に居住していた漢族以外の南方民族の神話であった。後漢から南北朝のころ、漢族が南方に進出して、これと接触するようになると、漢族にも継受された。

唐・欧陽詢（557～641年没）撰『芸文類聚』巻一「天部上」〈天〉「盤古」の話には、「徐整三五曆紀曰、天地混沌如鶏子、盤古生其中。万八千歳。天地開、陽清為天。陰濁為地。盤古在其中、一日九変。神於天、聖於地（中略）盤古極長。後乃有三皇」とする。梁・任昉（460～508年没）撰『述異記』（明・程榮校漢魏叢書所収）巻上「盤古」の話には、一層明瞭に南方説として記録している。「昔盤古氏之死也。頭為四岳、目為日月、脂為江海。毛髮為草木。秦漢間俗説盤古氏、頭為東岳、腹為中岳、左臂為南岳、右臂為北岳、足為西岳。先儒説盤古氏、泣為江河、氣為風、声為雷、目瞳為電。古説盤古氏、喜為晴、怒為陰。吳楚間説盤古氏、夫婦陰陽之始也。今南海有盤古氏墓。亘三百余里。俗云、後人追葬盤古之魂也。桂林有盤古氏廟、今人祝祀。南海中盤古国、今人皆以盤古為姓。昉按盤古氏天地万物之祖也。然則生物始於盤古」と、盤古の姓氏もあることが明記してある。

【注2】壮族の識者韋橋林氏（広西壮族自治区冶金地質探査研究員）に確認したところ、噴水の

噴「bu」とお父さんの父の「bo」が近音字である。ともに「波bo」に発音しているように聞こえる。

## 第6話、妹洛甲（ミーロージャ）姓を与える（広西大化）<sup>【原注①】</sup>

むかし、むかし、おおむかし、世の中の人々は姓もなく名前もなかった。人を呼ぶときは「あの一」と呼びかけ、それに答えるときは「はい」と言っていた。一人が呼ぶと、何人もが答える。また一人しか呼んでいないのに、何人もやってくる。実に不便だ。それに加えて最も頭が痛いのは、姓がわからないと婚姻を結ぶことができない<sup>【注1】</sup>。みんなが全部一つの家族から生まれたと思い、男は嫁を貰う勇気がなく、女も嫁ぐ器量がなかった。それで姓がわからないと結婚できないと思っていた。そこで妹洛甲（ミーロージャ）は思いついた。みんなに姓を与えよう。しかしどうつけるかすぐには方法<sup>【注2】</sup>が見つからない。

そのころ天下は四つの界に分けられていた。一つの界にはひとりの王がいた。天は上界、雷公が王となっていた。水底は下界、図額（トウグウ・龍王）<sup>【原注②】</sup>が王となっていた。森林は辺界、虎が王となっていた<sup>【注3】</sup>。大地は中界、妹洛甲（ミーロージャ）が王となっていた。話を聞くと他の界はみんな姓があった。それで妹洛甲（ミーロージャ）はみんなに教えを乞うた。最初に雷公に聞いた。「雷公の兄さん、兄さんのところではどうやって姓をつけたのですか」、すると雷公は答えた。「私のところはくちばしの形で決めたよ。くちばしが尖がっているのは鳥と呼び、口先が曲がっているのは鷹、平らなくちばしを持つのはアヒルと呼んでいるよ」妹洛甲（ミーロージャ）は思った。この考えはいいけれど、私たち人間の口はみんな同じなので使えない。そこで図額（トウグウ・龍王）に聞いた。「兄さん、兄さんのところではどうやって姓をつけたのですか」、すると図額（トウグウ・龍王）は答えた。「わたしのところは体の形で姓を与えたよ。体が長ければ蛇と言い、短ければ魚と言うよ」妹洛甲（ミーロージャ）はまた思った。私たち人間の体の形はみな同じなので、このやり方は合わない。そこで次は虎に

聞いた。「虎の兄さん、兄さんのところはどうやって姓をつけているの?」、すると虎は答えた。「わしのところでは火棍（火箸）<sup>〔注4〕</sup>を使って姓をつけているさ。わしは仲間を地面に寝かせ、火箸を使って焼きつけているよ。みんなが寝そべっているところに、わしが目をつぶってみんなの体のあちこちに火箸で模様を焼き描くのさ。書き終わってわしが目を開いて見ると、みんなの体についた模様がそれぞれ違うので、その模様に従って決めているのさ。体に9本の横縞の模様がついていたら虎で、6本あるのが猫で、斑点があるのを豹とした。そしてもっと斑点が大きなのを狸という姓をつけたのだ」。すると妹洛甲（ミーロージャ）はまた思った。私の子ども<sup>〔注5〕</sup>はすべて私の宝物なので、体には毛もないのに、このような火箸を使うという残酷なやり方で体に模様を描くことは到底できない。妹洛甲（ミーロージャ）は決心した。自分で方法を考えよう。考えに考えたら、とうとう病気になった。

妹洛甲（ミーロージャ）が病気になったということをみんなが聞いて、それぞれお見舞いの品を持って駆け付けた。ある者は桃を贈り、ある者は文旦（ザボン）<sup>〔注6〕</sup>を贈り、ある者は新米を贈り、ある者は鳥を贈った。妹洛甲（ミーロージャ）はこれらの品を見て突然思いついた。病気のこともすっかり忘れ、すぐにベッドから起き上がった。そして喜んで言った。「みんな早く集まって。私はみなさんに姓をあげますよ」と、そう言ってそれぞれが持ってきた品にちなんで、桃を持ってきた人には「陶」、文旦（ザボン）を持ってきた人には「朴」（壮語で朴はザボンの意）、米を持ってきた人は「侯」（壮語では侯は米の意）、塩を持ってきた人には「韓」（壮語では韓は咸と同音で、塩辛い意）、鳥を持ってきた人は「陸」（壮語で陸は鳥の意）、馬を持ってきた人は「馬」、牛を持ってきた人は「牛」、一人何にも持ってこなかった人は、手が空っぽの籠を持ってきたので、「藍」（藍・藍と籠は同音字で）とつけた。最後に妹洛甲（ミーロージャ）は、言い渡した。「まだ歩けない子どもや今日姓をもらいに来られなかった子どもたちは、みんな私と同じ黄（王）<sup>〔注7〕</sup>という名前にする」と。みんなに姓を与えたので、喜んで帰ろうとすると、突然台所からトントントンという音がした。音を出したのは、

ご飯を作る人だった。そして怒って言った。「私は苦勞してみなさんにご飯を作っているのに、どうして私にも姓をもらえないのですか」。その時、妹洛甲（ミーロージャ）は彼に姓を与えなかったことに気がついた。そこで妹洛甲（ミーロージャ）は言った。「あなたは毎日まな板とつきあっているので、覃（壮語でまな板の意）という姓を与えましょう。気に入りますか?」、するとその人は喜んで「よし」と言った。その日からみな姓を持つようになった。お互いに呼ぶのに便利になって、縁談をまとめたり<sup>〔注8〕</sup>、親戚関係を確認することができるようになった。

### 【原注】

- ① 本文口述者は覃鼎祥、85歳、壮族。採録翻訳者は覃承勳、壮族。採録地点は広西壮族自治区大化県那康街。原載は農冠品・陸上来・過偉編『女神・歌仙・英雄—壮族民間故事新選』（広西民族出版社、1992年出版）である。これは社会姓氏神話漢訳である。
- ② 図額（トゥグウ）は壮語の読みを表わすための漢字の当て字。鰐魚、蛟龍、水神、龍王の意味を持つ。『布洛陀經詩』の中には四方に四つの王・天上雷公（雷王）、水底図額（龍王）、森林虎王がおり、そして中界（地上）は妹洛甲（ミーロージャ）女王がいる。この女王という言い方は、母系社会の女性の地位と役割を反映している。

### 【訳者注】

【注1】中国の西南地域では、基本的に同姓不婚のルールがある。近親結婚を避けるために、毎年三月三の歌掛け祭りの際に、雲南省・貴州省・湖南省等の周囲の少数民族の人々が、遠方から参加する。漢民族以外の民族と婚姻関係をもつためである。これは訳者・項青が1986年にフランス人類学者のガイドで広西壮族自治区三江ドン族の三月三の祭りを調査した際に、村の長老から聞いた。

また壮族の人々が名前を持つようになったのは、明代末期多くの客家人や漢民族の移民が、桂柳地区に流れ込んできたため、元来首領や土司や身分の高い壮族人しか名字を持たなかったのが、百姓たちも名前をつけるようになったとのこと。（壮族の識者韋橋林氏）

【注2】本文では「法子」と書き、桂柳地方の西南官話の方言であり、「方法」の意味。

【注3】「辺界」はもともと国境地域の意味であるが、ここは「はずれ・さかい」の地域を指す。

「虎」に関しては、宋・周去非撰『嶺外代答記』巻九「禽獸門」〈虎〉には次のように「虎、広中州県多有之。而市有虎、欽州之常也。城外水壕、往々虎穴其間、時出為人害。村落則昼夜群行、不以為異」と記録がある。

【注4】「火棍」は火箸であるが、日本の火箸とやや異なり、木の枝でできており、先の方の炭化した部分を使って、文字を書いたり、図絵を描いたりする。

【注5】本文は「仔女」と書き、桂柳地方の西南官話の方言で、「わが息子と娘」の意味。

【注6】文旦（ザボン）は、広西壮族自治区の名物果物であり、海外華僑が祭事の時にも絶対欠かせない供えものである。

【注7】壮族語で黄と王の発音は同一のため、区別できない。なお王様と同じ意味を持つ駄洒落になるところを注目したい。

【注8】本文では「攀親」と書き、意味は縁談をまとめる。

## 第7話、妹洛甲（ミーロージャ）は子どもたちを分家させる

（広西大化）【原注①】

妹洛甲（ミーロージャ）の12人の子どもが大人になった。それでも同じ屋根の下に住み、ご飯を食べ、ともに農作業をした。とてもにぎやかに暮らしていた。しかし木は枝分かれをしないと実をつけないように、子どもは分家しないと自立できない。そこで妹洛甲（ミーロージャ）は、みんなを集め分家させるために、それぞれに生きるための手立てを考えるようになった。

ある晩、みんなを炉辺に集めた。妹洛甲（ミーロージャ）は、言った。「子どもたちよ、明日からお前たちはそれぞれ別れて生活をし、自力で生きる道を探さなければならない。今晚ここにお前たちが生きていくために必要なものを用意した。明朝、それぞれ一つずつ取ってその道具で生計を立てなさい。さあ、みんな寝なさい。そして明朝早く起きなさい」と。分家と聞くと、兄弟はとても悲しくなって、分かれるのは嫌だったが、しかしお母さんの話を聞かないわけにはいか



なかった。それでみんなはおとなしく黙って寝床に着いた。子どもたちが寝静まると、妹洛甲（ミーロージャ）犂、弓矢、書籍、背負子、さすまた、竹、砂糖黍、染料にする藍草、粳米、糯米、かぼちゃと粟などあわせて十二のものを用意して、炉辺の横に並べた。

翌日、長男がいちばん早く起きてきた。彼は犂が好きだったので、担いで畑に耕しに行った。この時から彼は「布板（壮人）」<sup>〔注1〕</sup>となった。次は二番目から十一番目の兄弟<sup>〔原注②〕</sup>もいっしょに起きた。選ぶときはお互いに譲り合い、弟は兄にどうぞと言い、兄は弟にどうぞと言って、誰も取らなかった。すると彼らはあるアイデアを思いついた。それは手拭いで目を隠してどれかを選ぶというものだった。その結果、二番目の兄は弓矢を選び「布斗（獵師）」<sup>〔注2〕</sup>に、三番目は書籍を取って「布哈（漢人）」<sup>〔注3〕</sup>となった。四番目は背負子を選んだので「布傣（タイ人）」<sup>〔注4〕</sup>になり、五番目はさすまたを取って「布淋（漁師）」<sup>〔注5〕</sup>になった。六番目は竹を取って「布苗（苗族）」<sup>〔注6〕</sup>になり、七番目は砂糖黍を取って「布星（漢語を話す砂糖黍畑の管理者）」<sup>〔注7〕</sup>になった。八番目は粳米を取って「布農（壮人）」<sup>〔注8〕</sup>になって、九番目は糯米を取って「布垌（侗族）」<sup>〔注9〕</sup>になった。十番目は藍染の藍を取って「布努（プヌ）」（瑤人〈ヤオ族〉）<sup>〔注10〕</sup>になって、十一番目はかぼちゃと粟が二ついっしょに置いてあったので二つを取って「布条（ヤオ族）」<sup>〔注11〕</sup>になった。そのとき末っ子<sup>〔原注③〕</sup>はまだ寝坊をしていた。太陽が上がり、昼になってからようやく起きてきた。周りを見ると何もなかった。そこでお母さんに「僕は何も貰わなかったけれど、どうしたらいいだろう」。すると妹洛甲（ミーロージャ）は、お母さんといっしょに暮らそうと言った。そうして末っ子はお母さんといっしょに暮らし、すべてのことをお母さんにさせた。そうして毎日遊んだり寝たりして、一つも自立できるような仕事を覚えなかった。そうこうするうちに妹洛甲（ミーロージャ）は年をとり、働けなくなった。妹洛甲（ミーロージャ）が亡くなるとき、末っ子をそばに置いて、不安そうに尋ねた。

「末っ子よ、お母さんが死んだら、どうやって暮らすのか」いとおしく思いながら尋ねた。すると末っ子は答えた。

「母さんよ、畑を耕したり、魚を取るなど私にはできません。私は生活というものがわかりません」と答えた。

妹洛甲（ミーロージャ）は、「お前は何もできないので、山に入って野生の果物を食べて暮らなさい」と言った。そこでベッドの下から箒を取り出して、未っ子のお尻に刺し込んだ。未っ子の尻尾となった。そこで未っ子は猿になり、山で野生の果物を食べて暮らすようになった。十二人の兄弟はこのように分家した。

### 【原注】

- ① 本文口述者は覃媽仰、女性。48歳、壮族。採録整理者は覃承勤、壮族。採録地点は広西壮族自治区大化県那康屯。原載農冠品・陸上来・過偉編『女神・歌仙・英雄—壮族民間故事新選』（広西民族出版社 1992年出版）。これは始祖神話中の始祖女神神話の漢訳である。民族の形成及び各民族の生産方式の特徴に対する解釈となっている。
- ② 本文では「老幺」といい、第十一番目の息子をさす。
- ③ 「老滿」は第十二番目の息子、未っ子をいう。いずれも桂柳地区の西南官話である。

### 【訳者注】

【注1】「布板（壮人）」の「布」は、壮族語では、様々の人種の前につく冠詞。「板」は村村人の意味である。農村に住む人。都会人、公家人や商売人ではない意味がある。

【注2】「布斗」の「斗」は、獵師の意味。

【注3】「布哈」の「哈」は、「学」「黒」とも書き、壮族語では「官家」「朝廷の軍隊」「漢人」を意味する。

【注4】「布傣」の「傣」は、「泰」「岱」とも書く。現在の雲南省に住む「傣族」のことではなく、壮族の中の「傣」集落に住む一族の意味。

【注5】「布淋」の「淋」は水の意味で、ここでは漁師を指す。

【注6】「布苗」の「苗」は後で外部から移住してきた苗族を指す。

【注7】「布星」の「星」は、客家語で意味は明瞭ではないが、外来民族の意か。そのため原文

では漢語を話す砂糖黍畑の管理者と訳したようである。

【注8】「布農」の「農」は、「農」の方言を話す人を指す。壮族一つの集落の壮人の意味。

【注9】「布垌」の「垌」は、壮族語では山々に囲まれている平地を洞、垌、侗、洞と言い、そこに住む人を「侗族」という。

【注10】「布努」の「努」は肉の意味があり、瑤人（ヤオ族）の人々はよく豪快に肉を食べることからこう呼ばれている。

【注11】「布条」の「条」は、壮族語で「逃走」、「急いで走る」の意味で、高い山地に住み、逃走してきた瑤族の人種を指す。

## 第8話、妹洛甲（ミーロージャ）、紅水河を造る（広西大化<sup>【原注①】</sup>）

天地が分かれてから雷は天界に行き、天を管理している。妹洛甲（ミーロージャ）は地上界に降りて、人間を管理する。兄妹の間で行き来はなかった。互いに助け合うこともできない。雷は天上界で雨を作り、喜んでいるときに雨を降らせる。機嫌の悪いときは何ヶ月も雨を降らせないで、旱魃にさせる。人々は田植えができないし、水も飲めない。天に頼る生活は、実に難しい。そこで妹洛甲（ミーロージャ）は、河を造ることに決めた。

妹洛甲（ミーロージャ）は石山を動かし、足で土を盛り上げ、両手で泥を持ち上げた。その結果、足が裂けて指が五本できた。手も裂けて五本指になった。手足の指がすべて傷だらけになった。そこで妹洛甲（ミーロージャ）は貝殻を取って手と足の爪としてつけた。続けて土を掘った。掘って掘ってどれだけの汗をかいただろう。そしてどれだけの血を流しただろう。やっと河を掘ることができた。しかし河に水がなく、河にはならない。そこで水を探した。

蛙を呼んできて、雷王に天の池を開けるようお願いをした。蛙は天に向かって叫んだ。

「お父さん<sup>【注11】</sup>、天の池を開けて。開けて」

雷王はちょうど寝ているときだったので、蛙の叫び声を聞いて、

「子どもたちは喉が渇いて水を飲みたいのだろう」  
と、思って小雨を降らした。

「天の池を開けてって言ったのに、小雨を降らせるなんて」  
蛙の叫び声がますます大きくなった。

「お父さん、天の池を開けて、開けて」  
雷王がこのうるさい叫び声にイライラして、足で天の板を蹴り飛ばした。そして下に向かって怒った。

「お前たちは姝洛甲（ミーロージャ）に伝えなさい。兄妹はすでに分家して、別々に生活をしている。互いに干渉はしないのだよ」

そう言いながら小雨を降らせるのも止めた。姝洛甲（ミーロージャ）は、雷王のこの冷たい仕打ちを見て、焦りながら怒った。心の中では、あなたが開けなければ自分で開けようと思った。

姝洛甲（ミーロージャ）は、99本の竹を持ってきて、それをつないで長い竿長い竿を作った。姝洛甲（ミーロージャ）は、この長い竿で山の麓から山の頂上まで昇り、また山のてっぺんから木の先方まで昇った。そして竹の竿を使って天の池の底を力いっぱいつついた。池の底は大きな穴が開き、下にザアーっと水が流れ落ちた。

今度は雷王があわてた。雷王は池をふさごうとしたが、天上には泥がない。そこで仕方なく姝洛甲（ミーロージャ）に頼んだ。

「妹よ、助けてくれ。泥をくれないか」  
姝洛甲（ミーロージャ）は雷王のようにけちな人ではなかった。あっさり  
「いいですよ。どのくらい欲しいのですか」  
と聞いた。

「箒一万個分頼む」  
「いいですよ」

と答えた。一箒、二箒、三箒、泥が箒ごと続けて天に届けられた。そのまま九千九百九十九箒運ばれた。あと一箒で池の穴がふさがれようとしたとき、姝洛

甲（ミーロージャ）は雷王の冷たさを思い出した。それで一万簍あげるのをやめて、最後の一簍を泥ではなく、砂を入れた。雷王は、泥と砂との区別ができないので、そのまま埋めた。池は治ったが、結局水漏れが続いていた。この漏れていた水は、今の紅水河になった<sup>〔注2〕</sup>。残念なことは水漏れが少ないので、いつも河川を満たすことができない。だから紅水河の両岸はとても高く、今にも上まで満ちることがないという理由である。

### 【原注】

- ① 文の述者は李媽秀英、女性。72歳、壮族。非識字。採録翻訳者は覃承勤、壮族。伝承地域は広西壮族自治区大化県岩灘村。原載は農冠品・陸上来・過偉編『女神・歌仙・英雄—壮族民間故事新選』（広西民族出版社、1992年出版）。

これは女神創世神話中の河づくりの神の話の漢訳である。雷公と妹洛甲（ミーロージャ）は、兄と妹であり、雷王は天界の池の水を管理する水神。螞蛄（蛙）は妹洛甲（ミーロージャ）女王の特使である。ここでは妹洛甲（ミーロージャ）は、泥と砂で天の池を補修する話となっている。（漢民族の女媧が穴を開けた天を補う話と類似）

### 【訳者注】

【注1】 壮族の神話の中には蛙が雷神の息子である話がある。邢莉『天神之謎』（中華民俗文叢所収。学苑出版社、1994年10月）第四章「天神の家族」2〈雨神與祈雨〉には「壮族認為青蛙為雷神之子、與雨有密切的關係。（中略）古越人的傑作・広西左江流域の崖画（花山壁画）上、有大量蛙的形象。壮族民間認為、主宰雨水和影響干旱的神是雷神和仂雷、則雷公和雷母。在壮族的伝説中、青蛙是雷神的女兒（亦有說是雷神の兒子）、雷神把他罰到地下、充当求雨的使者。壮族有祭青蛙之俗、而祭青蛙的目的就是祈求雨水」と、蛙と雨乞いの関係を説明している。

今日広西壮族自治区北西部の東蘭・南丹・天峨等の壮族地方には、毎年旧正月に行われる「蛙婆節」という祭りがある。「青蛙節」とも言う。新年の豊作・無病息災を祈るための伝統的な祭りである。壮族の神話、伝説によると「蛙はもともと雷神の息子である。天帝の発意による派遣のため、人間界に降りてきて、農作や物作りの手伝いをした。しかし愚かな人間

によって殺されてしまったので、天帝は怒った。人間に対して、死んだ蛙を探し出し、礼拝をすれば許すと言った。しかも手厚く葬式を行わなければ許さないとも言った。その後、人間は豊作のために降雨を祈るようになった」という。祭りは旧正月の朔日から月末まで、一か月の間に四回にわたって行事を行う。

なお古くからの天神、雷神の信仰は、宋・周去非撰『嶺外代答記』巻十「志異〈天神〉」には見える。「広右敬事雷神、謂之天神、其祭曰祭天。蓋雷州有雷廟、威靈甚盛、一路之民敬畏之、欽人尤畏」と記録がある。

【注2】紅水河は広西壮族自治区の北西部に流れる大河で、珠江水系の主流である。壮族にとっては母なる大河でもある。

## 第9話、姝洛甲（ミーロージャ）は水牛を取り調べる（広西東蘭）【原注①】

水牛<sup>【注1】</sup>はもともと壮族の始母神姝洛甲（ミーロージャ）が作ったものだ。最初はよく人の話を聞き、自ら犁を持って田に入り仕事をした。だから人が後ろについていく必要はなかった。後になって野原で暮らし、草を食べ、露が耳に流れ込んだので野性的になった。そして主人の言うことをきかなくなった。

人はこのことを姝洛甲（ミーロージャ）に報告し、それについて始母神姝洛甲（ミーロージャ）によしあしを判断してもらおうとしたのだ。姝洛甲（ミーロージャ）は言う。「水牛は少し野性的になってもかまわない。山に登って山の草を食べてもいい。それで餌を与える必要がなくなる」と。人はまた言った。「水牛は昼間昼寝して山で遊び、夜は夜で小屋に戻らないので、田で働かせようとするときには、見つからない」と。次の日姝洛甲（ミーロージャ）は、雲に乗って山の上に飛んで行った。そこで水牛が林の中で喧嘩をしているのが見えた。とても激しいようすで喧嘩している。その喧嘩に負けた水牛は言った。「ちょっと待ってくれ。角をもう少し磨けばまた決戦できる」勝った水牛は、「角を磨いても仕方がない。実力があるならかかって来い。なければ出て行け」と言った。姝洛甲（ミーロージャ）は喧嘩していた水牛の前に出て、何も言わずに牛の角を曲げた。

その上に硬い角をかぶせた。すると水牛の角は変形して再び剣のようにはならず、武器にはならなかった。妹洛甲（ミーロージャ）はさらに虎に言い聞かせた。「水牛がもし人間のために働かなくなったら、喰ってしまえ」と。それで水牛は怖くなって自然に主人に仕えて、野原に寝ることがなくなった。

水牛は人の所に戻ってきて、人々の耕作を手伝うようになった。しかしその野性的な性格はなかなか直らなかった。朝寝坊をして、人間が起こさなければ小屋から出てこなかった。歩くのもゆっくりで、田を耕し、少しでも疲れるとすぐに首木から抜け出し、泥田の中で転がって遊んだ。水牛は、もともと命令せずとも自ら犁で田を耕し、主人は田の畦で命令を出すだけで、あっという間に耕し終えていた。しかし野生的になってからというものは、主人は必ず犁を握り、竹の鞭で叩かねば動かなくなった。太陽が昇ると水牛は、川に逃げ込んで、仕事もせずに水浴びをする。主人が水牛を探しに来ると、すぐに見つからないように底に潜る。

人々はまた妹洛甲（ミーロージャ）に報告した。妹洛甲（ミーロージャ）にそのよしあしの判断を委ねた。妹洛甲（ミーロージャ）が命令を出すと、水牛はようやく戻ってきて、目を真っ赤にして自分の苦難を訴えた。「始母神様、主人は私に鞭を打つのです。私たちは二度と田を耕したくありません」。すると主人は反論した。「お前たちは怠け者だ。田の中の苗を盗んで食べているのです。だから叩かれても仕方がない」。すると水牛は自分が力持ちだと言うことをひけらかして「打ちたければ打っていいですよ。それではあなたとまず力比べをしましょう。負けたほうが耕すことにしましょう」といい終わるや否や、頭を主人に向けて突進した。妹洛甲（ミーロージャ）は大声で一喝した。そして麻の縄を投げ、水牛の角にはめた。続いて主人に命じて水牛を大木の上に釣り下げさせた。そして竹片で鼻を通し麻の縄で縛った。妹洛甲（ミーロージャ）は水牛に尋ねた。「どうだ。これからもわがままを通すか？」水牛はハーハー息をしながら「二度としません。主人の言うことを聞きます」と水牛は頭を下げて、主人について行き、牛小屋に連れ戻された。

水牛は鼻輪をした後は、二度と主人にはむかうことができなかった。しかし毎日田の仕事が終わって縄を解かれると、山に走って行き、雄牛雌牛木の下で遊んだ。遊びすぎて草も食えず、水も飲まないの、みるみるうちに風に吹き飛ばされそうに痩せていった。そうになると水牛は耕すこともできない。田は荒れた。主人は困って、また妹洛甲（ミーロージャ）を探して、対策をねるように訴えた。

妹洛甲（ミーロージャ）は木の下に行き確認した。確かに水牛は飲まず食わず。雄牛も雌牛もため池の中で泥遊びをして、体中泥だらけだった。そこで一計をめぐらして、ため池のほとりにたくさん生えている新鮮な新芽を水牛の口元にもっていったが、食べなかった。妹洛甲（ミーロージャ）は、水牛に自分たちが衰弱した理由を説明するようと、木の下に来るように言った。すると雄牛は雌牛のせいにした。「雌牛の発情期が多すぎる。いつも自分が泥のため池の中に誘惑される」と。

雌牛は雌牛で「雄牛の情が多すぎて、草も食べられないほどうるさい」と、このように長く言い争っているうちに雌牛が泣きながら、さまざまな理由をつけて言い返した。

妹洛甲（ミーロージャ）は次のように定めた。「そのようなことであれば、雌牛よ、お前は毎年一回だけ発情するのを許そう。発情期でないときに雄牛は雌牛に近づいてはいけない」と。その判決を聞いて雄牛は喜び、雌牛も笑った。

それで水牛は毎年恋愛するのは一回だけになった。その他の時はそれぞれ草を食べ、せっせと犁を牽くようになった。水牛の野性的な性格が変わったので、主人も喜んだ。毎日夕方、山から水牛を迎え、新芽を取り、晩ご飯として食べさせた。妹洛甲（ミーロージャ）も大変安心して喜んだ。四月八日を水牛祭りと定め、主人は水牛に休みを与え<sup>〔註2〕</sup>、楽しく水牛祭りに参加するようになった。

#### 【原注】

- ① 本文口述者は覃鳳蓮、女性、54歳。壮族、農歌手。採録翻訳者は覃劍萍、壮族。伝承地域は広西壮族自治区東蘭県紅水河流域。原載は農冠品・陸上来・過偉編『女神・歌仙・英雄



一壮族民間故事新選』（広西民族出版社、1992年出版）。これは動物生理の特性を解釈する神話と牛祭りの風俗が複合した神話の漢訳である。

### 【訳者注】

【注1】水牛、清・屈大均撰『広東新語』卷二十一「獸語」〈牛〉篇には「広州凡潮田稍高者、犁必以牛。牛皆水牛。春以犁田、冬以駄挫。搾者、搾蔗蔗以為糖也」と記す。

【注2】牛の休閑日は、清・屈大均撰『広東新語』卷二十一「獸語」〈牛〉篇には「韶州十月朔日、農家大酺。為米相饋。以大糲（糲は黒米の餅）粘牛角上、曰牛年。牛照水見影而喜、是日牛不穿繩。謂之放閑」と、詳しく記しているが、祭りの日にちが異なる。

## 第10話、妹洛甲（ミーロージャ）が裁断を下す（広西東蘭）【原注①】

古代、天地は一つの巨大な石であった。それはきっちりと置いて隙間がなかった。そこで壮族の始祖布洛陀（プーロート）は、この巨大な石を割って、初めて天と地に分けた。妹洛甲（ミーロージャ）は石を割ったときに、煙とともに石に穴から飛び出した<sup>【注1】</sup>。彼女は世の中で最初の女となった。

天と地が分かれたといっても、二つに分かれただけで、何もなかった。世の中が真っ暗で何も見えなかった。布洛陀（プーロート）は天に昇っていて、太陽、月、そして五つの星を作った。妹洛甲（ミーロージャ）は大地に残って山や田を作った。二人は名だけの夫婦であって、実際の二人の間は千万里ほど離れていた。ある日、妹洛甲（ミーロージャ）は山を作り終えて疲れていたため、そこで楓樹坳<sup>【注2】</sup>の入り口で横になっていた。山風が温かく、楓の香りが芳しく、妹洛甲（ミーロージャ）は布洛陀（プーロート）と共寝して夫婦のように仲睦まじくしている夢を見た。しかし目が覚めると誰もいなかった。ただお腹が痛い。涎が流れて、風の妊娠<sup>【注3】</sup>をしていた。

妹洛甲（ミーロージャ）は風妊娠をした後、六人の男の子、六人の女の子を生んだ。その時、世間に米、穀物、綿、麻などなかった。赤ん坊はただお乳を飲む

だけで、着るものはなく、裸のままだった。そしてある者は話せない。ある者は歩けない。ある者は泣くだけで笑うことができない。ある者は寒がったり、暑がったり。妹洛甲（ミーロージャ）はしかたなく、みんなを実家蘭太<sup>【原注②】</sup>の山の洞窟に入れ、実家の人々に育ててもらうように頼んだ。

冬になると蘭太地方は暖かい岩風を吹き、洞窟内の鍾乳石に吹きあたり、そこで鍾乳石からは乳のような真っ白なものが流れ出てきたので、子ども達に飲ませた。何口も飲まないのにお腹がいっぱいになり、元気に走り回って遊んでいた。夏になると蘭太の洞窟周辺は涼しい山風が吹く。その山風とともに美しい歌声も洞内に吹き込んでくるので、子ども達は喜んで、うれしくて笑い声や会話等の声で溢れた。ちょうど七月十四日、妹洛甲（ミーロージャ）は山に帰ってきた。彼女は子ども達に歌を教え、三日三晩、山の養育の恩を歌で称えた。そしてこの日を敬岩節<sup>【注4】</sup>と定めた。子孫達に毎年この日に岩を敬うようにさせた。今の壮族の老若男女は、毎年七月十四日の祭りの日になると、多くの人々が洞窟に集まってきて、香をあげたり、歌を歌ったりする。これはすべて昔からの妹洛甲（ミーロージャ）の言い伝えだ。

妹洛甲（ミーロージャ）の子ども達は大人になった。男の子は天下を見まわしても妻が見つからなかった。女の子は山を越え、川を渡っても夫が見つからなかった。それはその通りだ。世の中に彼ら以外、人間がいるものか。十二人は兄弟で、同胞なので互いに結婚するわけにはいかない。妹洛甲（ミーロージャ）は彼らを楓樹坳の谷あいに入れて行った。そこには大きな楓の木があった。木の上には十二種類の果物と葉があった。山風が吹くと果物からいい香りがした。妹洛甲（ミーロージャ）は子ども達に、木の上にはどのような果物があるかを聞いた。子ども達は、楓、桃、李、梨、蜜柑、枇杷、ライチ、竜眼、ザボン、オリーブ、サネブトナツメ（酸棗）、牛奶果など十二種類の果物があったと答えた。妹洛甲（ミーロージャ）は男の子に木に登って果物を取るように指示した。女の子には下で受け取るように言いつけた。偶然、不思議なことに長男が落とした楓と桃は長女が受けとり、次男が落とした李と梨はすべて次女が受け取った。他の兄弟も

同様だった。木の上の男の子達は一人二種類の果物を落とし、木の下では一人二種類の果物を受け取った。そこで妹洛甲（ミーロージャ）は言った。「果物も偶数で揃った。人間も夫婦になるべきだ。これは天と地の夫婦の定めだから、誰もそむくことはできない」と。十二人兄弟姉妹は全員楓の木の下に跪いて、拝んだ。そして妹洛甲（ミーロージャ）に対しても拝んだ。それぞれ六対の夫婦となった。これから人類は繁栄し、世の中至る所に竈の煙が立った。

俗に言う「腹が減っても、三尋<sup>【原注③】</sup>は歩ける」と。しかし裸のままでは、半歩歩いてても恥ずかしい。だから妹洛甲（ミーロージャ）の子孫はバナナの葉で前を隠し、雨風のときは外に出なかった。寒いとき、暑いときも外に出なかった。そのごろ山の中で鳥獣はすべて毛が生えていないので、草叢の中でじっと座って動かなかった。草木も葉も生茂っていなかった。世の中は元気がなかった。

妹洛甲（ミーロージャ）が山の上を耕していると、一羽の山鳥がやってきて、次のように言った。

「ク、ク、ク。あなたに綿の種を一つ上げましょう。そのかわり、私に綿を栽培して美しい服を作ってください」と。

すると一匹の川獺が川から出てきて、

「私も麻の種を一粒上げますから、三日後に麻を収穫したら、私に服を作ってください」と言った。鳥と獣も妹洛甲（ミーロージャ）が作ったものなので、妹洛甲（ミーロージャ）は自分の子どものように可愛がっていた。

妹洛甲（ミーロージャ）は、「安心しなさい。必ず作ってやるから」と答えた。

二粒の綿と麻の種を植えると、しばらくして山は一面白い綿に覆われた。麻の苗も元気に育った。妹洛甲（ミーロージャ）は綿を布に織り、藍、黒、緑、赤などに染めて、子ども達の服を仕上げた。子ども達は着物ができると、みんな生き生きとした。妹洛甲（ミーロージャ）は麻の糸を打って七十二色の美しい色に染めた。それをそれぞれ鳥や獣に与えた。それからというもの、鳥は高く飛び、獣は喜んで走り回るようになった。山鳥や川獺は綿と麻の種を見つけた功をねぎらうために、妹洛甲（ミーロージャ）は山鳥に六色の羽を贈った。それから山鳥は

一番美しい羽を持つことになり、百鳥がやってきて褒められることになった。川獺はふわふわとした衣を得たので、水に入っても濡れない。厳しい冬にも寒くないようになった。水陸の両方に住めるので、森の百獣も祝福に訪れた。

鳥や獣たちは美しい色の衣を得たので、森のあちこちで見せびらかし、騒いだ。それを見た草木もやってきて、自分たちにも服をくださいとせがんだ。百の草と千の木、それぞれが自分の理屈を言い出し、美しい服を手に入れるために争った。それはもう天がひっくり返ったようにぎやかさだった。妹洛甲（ミーロージャ）はそれを見て言った。「私は誰の味方もしない。全員緑色の服を与えよう」と。それから今の草木には、みんな緑の葉がつくようになった。しかし後になって妹洛甲（ミーロージャ）は、山一面の緑を見てとても単調だと思い、一部の草木に赤、黄、青、紫、白の花をつけた。それでとても美しくなった。

それでも草木は納得せず、なおも争い続けた。毎日毎日妹洛甲（ミーロージャ）のところに告げ口に来た。花のない草木が、一番声が高かった。その声で石山が崩れそうになった。赤い花をもらった草木も満足せず、黄色の花を貰った草木も美しくないと言った。青い花は白い花を不細工だとののしった。妹洛甲（ミーロージャ）は何度も慰めた。花の種類があまりにたくさんあるのはよくない。花の色がたくさんあるのも雑である。しかし花たちは言うことを聞かず、手と足を使って喧嘩になった。妹洛甲（ミーロージャ）は大変怒った。石の台を叩いて一喝した。

「今日という日からお前たちの口を封じる。二度と話すことを許さない。また移動することも許さない。天辺と根をひっくり返して泥の中に固定する」と命令した。

そのときから草木は二度と話すことができなくなった。髪の毛（根）は土の中に埋められ、手と足（枝）は逆さに立つことになった。

草木の身の上に起こったことを見て、鳥と獣は驚いた。その時から鳥獣はウーハーウーハーとしか言わないようにして、喧嘩もせず、聴覚障害者のふりをした。しかし虎は「自分は力が強い」と自慢して、弱い動物をいじめるようになった。

そして血や肉を食べるようになった。水牛は草をたくさん食べるようになり、一日で山の斜面を踏み潰した。豚は食べたら寝て、犬は吠えるばかりで、馬は走り回っている。

ある日妹洛甲（ミーロージャ）は、獣を集めて会議をした。虎は泣きながら訴えた。

「私は一度に何頭も子を生むのは大変だ。冬はいつも腹が減っているから」

水牛も続けて訴えた。

「私は背が高いけど、何も役にも立たない。草を食べても満腹しない」

豚や犬、羊はみんな泣きながらそれぞれの悩みを訴えた。妹洛甲（ミーロージャ）はにんまりとして話を聞き終えると、次のように判決をくだした。

「虎よ、きちんと聞け。お前はこれから一生に一度だけしか子どもを生めない。そうすれば百獣は被害にあわなくなるだろう。水牛もよく聞け。お前は力が強いけど、役に立たないといっている。これからは犁で畑を耕すようにしなさい。また人が鼻を牽く進める方向だけの草を食べなさい。豚はよく寝るのなら起こさない。そうして太った後は、肉を人々に食べさせなさい。犬は吠えるので、玄関の外で寝なさい。人間の夜の番犬になりなさい。馬は走るのが好きだったら、轡をつけなさい。一生人間があなたに乗ることにしよう」

他の鳥獣はこれを見て大変だと思い、二度と文句を言わなくなった。

妹洛甲（ミーロージャ）は言った。人間界の平安のために、お前たちをすべて話せないように薬を飲ませる。その日から鳥獣は話せなくなってしまった。妹洛甲（ミーロージャ）のところに来て二度と大騒ぎができなくなった。牛や馬、豚はすべて妹洛甲（ミーロージャ）の言うとおりにして、人間のために働くようになった。

妹洛甲（ミーロージャ）が裁断を下した日から、草木は静かになって落ち着いた。鳥獣は静かになった。天下はようやく安定した。

# 【原注】

- ① 本文口述者は覃鳳平、女性。56歳、壮族、農民歌手、広西壮族自治区東蘭県和龍村人。覃茂徳は76歳、壮族。師公兼農民、東蘭県長洞村人。採録翻訳者は覃剣萍、壮族。採録場所は広西東蘭県大同郷和龍村、西合郷長洞村。原載は農冠品・陸上来・過偉編『女神・歌仙・英雄—壮族民間故事新選』（広西民族出版社、1992年出版）。これは創世女神が世を収める神話の漢訳である。先祖たちは母系社会に対して崇高な思想を反映するものである。
- ② 「蘭太」は壮族語で、実家の意味。
- ③ 「派」は壮族語の長さを表現する言葉で、両手を広げた長さを「一派」という。

### 【訳者注】

【注1】本話はもともと天地が一つの巨大な石であって、それが壮族の始祖布洛陀（プーロート）によって、巨大な石が割られ、初めて天と地に分けられたという神話である。また始祖女神の姝洛甲（ミーロージャ）は石を割ったときに、煙とともに石の穴から飛び出した。そこで人間最初の女性が生まれた。

【注2】楓樹は地名、「坳」は山の谷あいの意味で、楓樹の木がある山合の意。「楓樹」は壮族の人々にとっては、特別の意味がある。清・屈大均撰『広東新語』巻二十五「木語」〈楓〉篇には「嶺南楓、多生山谷間（中略）語曰、喜雨、楓喜風。凡陽木以雷而生、陰木以風而生。楓、陰木也。以風而生、故喜風。風去而楓声不止、不與衆林俱寂、故謂之楓。（中略）楓者風之所聚、有癭風神聚之、曰楓子鬼。稽含云、楓老有癭。中夜大雷雨、癭則暗長。一枝長可数尺、形如人、口眼悉具。謂之楓人。越巫取之作術、往々有神。（中略）小婦持珠来、求子步遲廻」と、風による妊娠風習や子授けが見られる。

【注3】風の妊娠とは風に当たったことで妊娠するという伝説。壮族では古くは母系社会が続き、男性のいない女性ばかりの集団であったと言われていたので、このような言い伝えが残った。鹿億鹿『粟種與火種——台湾原住民的神話與伝説』（台湾秀威經典出版、2017年6月）第六章「女子国神話」〈三、因風受孕的女人部落〉によれば、台湾の原住民・泰雅族等いくつかの民族にも同じ神話伝説が見られる。

【注4】姝洛甲（ミーロージャ）の実家があった蘭太地域では、毎年七月十四日に敬岩歌節が行われる。毎年の旧暦七月十四日、姝洛甲（ミーロージャ）は山に帰ってきて、子ども達に歌

を教え、三日三晩、山の養育の恩を歌で称えた。子孫達に毎年この日に、育ててくれた岩の洞窟を敬うようにさせた。今の壮族の老若男女は、毎年七月十四日の祭りの日になると、多くの人々が洞窟に集まってきて、香をあげたり、歌を歌ったりする。現在の壮族の歌掛け祭りの始まりと言われている。

## 第11話、花婆のお婆さんから鼻をもらう（広西柳城）【原注①】

むかし、あるところに牛飼いがいた。とても美しい男だが、鼻が少し低かった。遠くから見ると鼻が二つの穴にしか見えなかった<sup>【注1】</sup>。それでも彼は心優しい人であった。

ある日、彼は何人かの牛飼いと山の麓で、牛を放牧していた。そこへ突然大雨が降り出した。みんなはあわてて花婆廟<sup>【注2】</sup>に雨宿りした。この寺は古いお寺だったので、あちこち傷んでいたのも、屋根から雨漏りがした。大きな花婆の仏像の頭の上の瓦は、大きな穴が開いていたので、雨水がどんどん流れこんでいた。それを見た鼻の低い牛飼いは、かわいそうだと、自分の服を脱いで屋根に上って、その壊れたところを直した。他の彼より年下の牛飼いたちは、みんな彼が馬鹿だと言ってふざけて笑っていた。

その日の夜、鼻の低い牛飼いは、夜中に夢を見た。花婆廟のお婆さんが、彼のベッドの前に座って言った。「若い人よ。お前は心優しい人だねえ。褒美に良いことを教えてあげようね。今の皇帝には娘がいる。その娘は鼻筋がとても高い。娘は人柄の良い鼻筋の通った男を選んで、夫にしようとしている。お前は人柄いいが、残念なことに鼻が低い。それで私はお前に鼻を贈ろう。お前の枕元に置くので、目が覚めたらその鼻をつけなさい。そうすれば鼻が高い人になるよ」と。

そう言ってお婆さんはすぐに消えた。次の日、牛飼いが目を覚まして、半信半疑だったけれど枕もとを見ると、そこには鼻があった。彼はその鼻を自分の鼻につけた。それはぴったりとついて生まれつきのものと変わらなかった。

鼻の低い牛飼いが立派な男になった噂は風とともに一から十、十から百、一つ

一つの村へ伝わった。そうしているうちに皇帝のところまで伝わった。皇帝はもと多くの人を使って自分の娘にふさわしい若者を探していたので、この噂を聞いてすぐに使者を派遣した。そうしてこの鼻の低かった牛飼いは、役所から遣わされた籠に乗って都に運ばれた。

すると鼻の低かった牛飼いがお姫様の夫になったと聞いた、以前一緒に働いていた牛飼いたちは、羨ましくて仕方がなかった。中でもいつも彼を馬鹿と言って、からかってばかりにいた牛飼いは、特に悔しがり、何日も寝ることができなかった。そして彼はある方法を思いついた。それは夜明けに竹竿を持って花婆廟に行き、頭の上の瓦に大きな穴をあけることにした。ちょうどその時大雨が降り出した。彼は鼻の低い牛飼いの真似をして、花婆の仏像の前に来た。「花のお婆さん、雨が降っているのかわいそう。私が雨漏りを直してあげるよ」と言って、雨に濡れたままで屋根の上に登って、その穴に自分の服をかけた。

その日の夜、その牛飼いはまた夢を見た。花のお婆さんがベッドの前に来て、「若者よ、お前は心優しい青年だ。いいことをおしえよう。今の皇帝には娘がいるが、二番目の娘も美人で、鼻筋がとおっている。彼女は鼻の高い男を選んで夫にしたい。私はお前に高い鼻を枕元に置いてやろう。目が覚めたらその鼻がいい香りかどうか嗅ぎなさい。その後鼻の上にのせれば、お前の鼻は高くなるよ」と、花のお婆さんは言い終わるとたちまち消えた。

牛飼いは喜んで目が覚めると、手で枕の下をさぐった。すると本当に鼻があった。彼は花のお婆さんの言うとおりに、まずにおいを嗅いだ。するとなぜかその鼻はたちまちその男の鼻についた。引っ張っても、引っ張っても取れない。それで鼻はどんどん長くなり、口の下まで垂れてきて、長い肉の棒のようだった。

この牛飼いは自分の鼻が長く醜くなったので、部屋を出られなくなった。飲み物や食べ物を玄関前まで持ってくるのに、それらを食することができなかった。その都度ご飯を食いたいと思って、茶碗を口に持ってくるが、鼻が邪魔で一口も食べられなかった。口が渴くので、お茶を飲もうとすると、その長い鼻はなぜかジュンと振れるので、茶碗は地面に落ちる。結局花のお婆さんの屋根をあけた牛



飼いは、自分の部屋で餓死してしまった。

【原注】

- ① 本文採集整理者は楊欽華、68歳。文化館幹部。伝承地域は広西壮族自治区北部の柳城県。出典は『中国民間故事広西巻』の『柳城民間故事』（上巻・資料本。泰秉忠・鄧啓明・鐘敬文編、柳城県三套集成委員会、1987年印刷）。

この話は人間の顔の生まれながらの特徴についての話である。昔の人が花のお婆さんを通して、人間の人生とはどういうものかを語る話となっている。また壮族の人々が花のお婆さんを崇拝する話でもある。

【訳者注】

【注1】 今日でも、広西壮族自治区では、鼻が低い人を「鼻が天に向いているので、遠くから見ると鼻が二つの穴にしか見えない」という。

【注2】 花婆廟は花のおばさんを祀る祠。清・屈大均撰『花東新語』巻六「神語」〈花王父母〉篇には、「越人祈子、必於花王父母。（中略）華山上有石養父母祠。秦人往々祈子。亦花王父母之義也」と記している。

第12話、雁を射る人、女人国に到る（広西隆安）【原注①】

むかしむかし、おおむかし。ある青年がいた。名を特龍（トロン）と言った。その男は狩りをして生計を立てていた。彼は狩りをしたらその腕は百発百中で、彼の右に出る者はいなかった。それは雁が空を飛ぶのを見ると、一矢で雁の目を射抜くほどだった。

ある日、特龍は友達の家でお酒を飲んで帰る途中、山の斜面に寝そべて休んでいた。その時、空に雁が八羽飛んでいくのを見た。特龍はすぐに弓を出して、ソソソッと次々に矢を放って八羽の雁を射落とした。特龍は八羽の雁を拾って自分の横に置いたまま、また寝入ってしまった。

八羽の雁は射られたけれど死んではいなかった。しばらくして雁は動き出し、特龍を抱えて空に飛び立った。飛んで、飛んでどんどん飛んで、千本の河を越え、一万の山を越え、ようやくある国にたどり着いた。そこで特龍は地面に下ろされて、雁はどこかへ飛んで行ってしまった。

そこで特龍はやっと目が覚めた。目をあける、八羽の雁はどこにもいなかった。座ったまま周りを見渡すと、知らない場所なので、なぜ自分がここにいるのかわからず、呆然としていた。特龍は立ち上がり、前へ歩きを進めた。しばらく歩くと湖のほとりに着いた。そこにはたくさんの柳があり、その柳の下に女性の衣があった。湖の中に女たちが水遊びをする声がしていた。特龍はあわてて大きな木の陰に隠れたが、先に進むことができなかった。

ここは女人国<sup>〔注1〕</sup>だった。娘たちは裸になって水遊びをしていて、終わると岸に上がった<sup>〔注2〕</sup>。特龍は頭を出して覗いてみると、なんとそれは雪と珠のような白い肌を持った美しい娘たちだった。彼は彼女たちに見つからないように再び身を隠した。娘たちは体をきれいに拭いて、それぞれの服を着て家に帰った。しかしただ一人達麗（ダーリー）という女の子が帰らなかった。それはどうしてか。彼女は男の芳しい香りに気がついたからだった。ここは女人国なのに、どうして男のにおいがするんだろう、きっと近くに男がいるんだろうと思った。彼女はあちこち探した。すると木の陰に隠れている特龍を見つけた。

達麗は喜んで言った。「わあー、すてきな男の人だ。あなたはどこの仙人なの？なぜここにやって来られたの？」

それを聞いて特龍は少し怖くなったが、目の前に若くて美しい、その上優しい女の子なので、段々落ち着いてきた。

「私は雁を射りして生計を立てている者だ」と彼は言った。「昨日、私は八羽の雁を同時に射落とした。それを拾ってきて、私の横に置いておいたが、私はそのまま寝むってしまった。気がついて目が覚めると、雁の姿が消え、なぜか私は誰かによってこんな所に運ばれてしまっていた。そこで教えてほしい。いったいここはどこですか」と。

すると達麗は笑いながら答えた。「ここは女人国ですよ。ご存知ですか。女人国には男が一人もない国で、国王から国民まですべて女一色です。これは本当によかった。あなたのようなすてきな男がやって来た。これもみな神様の思召しだ。あなたと私は縁があったので、千里を越えて会えた。だから私たちは夫婦になりましょう」。特龍はそれを聞いてうなずいた。達麗は特龍の手を引いて、天と地に向かって夫婦の儀をし、それで二人は結婚した。

達麗は特龍を自分の家に連れていき、部屋の中に閉じ込め、誰にも分らないようにした。ふたりは仲良く暮らした。甘い新婚生活をした。

しばらくすると女人たちは達麗の家の前を通ると、男の芳しい匂いがしたので、達麗に尋ねたが、達麗は絶対に認めなかった。しかし後に達麗のお腹がどんどん大きくなった。この噂はたちまち国王の耳に入った。国王は言った。「私は一国の国王なのに、いまだに結婚する相手の男もない。達麗は貧しい庶民なのに、どこから男が連れて来たのか？ すぐに私のところへその男を送りなさい」と。国王は特龍を探し出し、王宮に連れてきた。そして彼を自分の夫になるように命じた。しばらくすると達麗は双子の男の子を生んだ。皇帝もすぐに妊娠して、男の子を生んだ。それから女人国にも男がいるようになった。

# 【原注】

- ① 本文口述者は梁朝弼、男。76歳、壮族、広西壮族自治区隆安県雁江人。農民、非識字。採集者は凌澤深、農民。採集時間は1986年9月4日、伝承地域は雁江周辺。原載『隆安県民間故事集』（許汝參主編、隆安県民間文学三套集成編集委員会、1987年編印）。

この話は女人国神話の漢訳である。国王、特龍ともに共同で男女融合の社会を構築している。神話から伝説に変容している。母系社会から父系社会へと移行する壮族の先住民たちの深層意識を表わした。母系社会が徐々に父系社会を承認する過程を物語っている。

【訳者注】

【注1】中国の西南地域の少数民族では、未だに女人国が存在する。壮族もある時期まで母系社会であり、いまでも女性が優位である。晋・張華撰『博物志』卷三にも「魏志東夷伝曰、又言有一国亦在海中、純女無男」と記されている。また宋・周去非撰『嶺外代答記』卷三「外国門下」〈東南海上諸雑国〉には、「又東南有女人国、水常東流。(中略)昔嘗有舶舟漂流其国、群女携以歸、数日無不死。有一智者、夜盜船亡命得去、遂伝其事。其国女人、遇南風盛発、裸而感風、咸生女也」と、女人国の事やその国の女性は皆南風に当たることで妊娠するという記述がある。しかし全員女の子を生むと記されている。

【注2】広西壮族自治区の少数民族では、畑の働きを終えた娘たちは、服は岸において、裸になって川で水を浴びる風習がある。好きな娘がいれば、その服をとっても良く、それを嫌がり頭の上に服をのせて水遊びする人もいる。これは翻訳者項青が1986年頃、三江侗族地域で実際に見たものである。